



# 前へ

2004.10.23  
～震度7に克つ～

新潟県中越大震災 / 川口町木沢・峠地区の記録



フレンドシップ木沢

# 前へ

2004.10.23  
～震度7に克つ～

---

新潟県中越大震災  
川口町木沢・峠集落の記録

---

フレンドシップ木沢

# 目次

## ドキュメント二〇〇四秋

～写真で綴る新潟県中越大震災～

03

## 消えない記憶

～わが家の中越大震災～

13

## 忘れられない人たち

～お世話になった人たちからのお便り～

45

## 新潟県中越大震災の概要と軌跡

55

## あれから三年

二〇〇七 木沢・峠から…みんなで頑張っています！

69

## 新聞報道された木沢・峠

87

# ドキュメント 2004 秋

---

～写真で綴る新潟県中越大震災～

# 震度7来襲

2004年10月23日17時56分。  
静かな土曜日の夜、一家団欒の時間に  
未曾有の大地震に襲われました。



木沢隧道



大きな被害を受けた田



二子山斜面の崩落





倒れたお墓



崩れ落ちた壁



震源に近い私たちの木沢・峠地区。  
震度7という激震は、  
私たちに大きな爪跡を残しました。

# 地域愛

地区外へ道路は通行止め、  
 ライフラインは完全停止、家屋を失った人もいました。  
 そして相次ぐ大きな余震。  
 絶望と恐怖の中で始まった避難生活でしたが、  
 私たちは互いに助け合い、励まし合い続けました。



木沢会館「よろみ」前 交差点で2晩過す



旧木沢小学校体育館での避難生活



# 心強い応援団

地区、町、県を越えて多くの方が助けに来てくださいました。  
孤独だった私たちは、どれほど勇気づけられたことでしょうか。  
皆様のご厚意を私たちは決して忘れません。



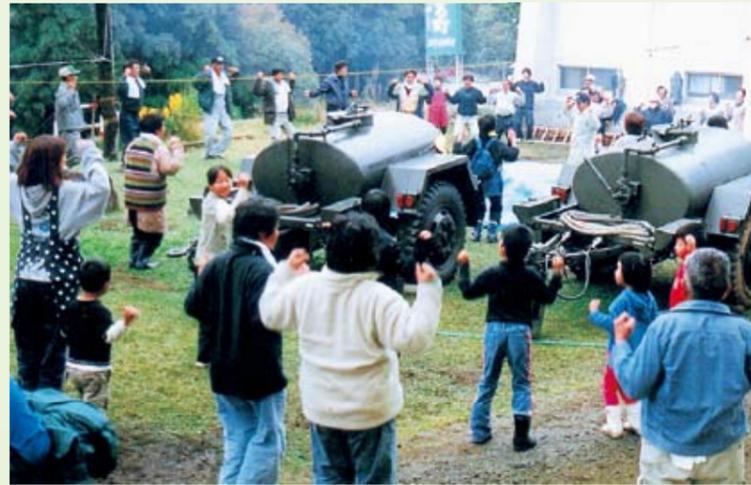
負傷者の搬送  
(旧木沢小学校グラウンド)



避難所に設置された浴槽  
(練馬区より)



粕江市が持参した  
仮設トイレが届く。  
途中、道路崩壊場所を  
人力で運搬。



自衛隊の皆さんによる心あたたまる演奏会  
(旧木沢小学校グラウンド)



# そして前へ

地震は私たちの町や暮らしに、とても大きなダメージを与えました。  
でも、立ち止まっている訳にはいきません。  
内外から多くのご協力を得ながら、  
私たちは復旧復興へと歩みだしたのです。



集会所前の仮設住宅の除雪



再開された「さいの神」



復興祈念運動会を開催



翌春、被災を免れた田で田植え

消えない記憶

---

～わが家の中越大震災～

## 一人でやって行けるうちは

鹿蔵

小林 四郎

妻が台所で夕飯の準備をしており、私は茶の間にいた時、大きな揺れが突然我が家を襲いました。それが中越地震の本震でした。激しい縦揺れ、横揺れ、私はあわてて外に飛び出し、妻も少し遅れ無事に外へ避難出来ました。

私はしばらくの間、外のコンクリートの上で余震のため激しく揺れ、今にも倒れそうな自宅をただ呆然と見ていました。その時妻は、家から少し離れた畑の中でうずくまり、恐怖からか震えていたのを今も思い出します。

そのうちに、武七の恵美子さんが集会所前に集まるよう廻ってきたのでそちらに避難をしました。

避難所生活は大変でしたが、食事もその他身の回りのことも、集落の皆さんなどから良くしていただき乗り越えることが出来ました。また、避難生活の中で時間を見つけ、家の片付けをしました。おかげさまで、ボランティアの皆さんなどからの手助けも借りることなく、私一人で行なうことが出来ました。

非難勧告が解除された後自宅に戻りました。翌年には、傾いた自宅の基礎や柱、壁など三ヶ月ほど掛け大規模な修理をして、今も暮らしています。

田んぼも大きな被害を受けましたが、復旧し三年ぶりで今年作付けが出来ました。耕作は全て本家に頼んでおり、二年間の休耕と復旧田のためか、収穫は少なかったようです。

今は一人で生活しています。歳を取り、冬の雪下ろしは大変ですが、魚沼市で暮らす長男が来てやってくれています。

長男との同居もありますが、そんなに離れていませんし、住み慣れた木沢集落、一人でやって行けるうちは、頑張っここで生活できればと思っています。

## わが家の中越大地震

福松

星野 幸一

家においてTVを見ようとしていた時に地震が起こった。妻は料理をしていた。地震で茶だんすが倒れて肩を打った。

家は壁が落ちたり、柱が傾いたが倒れはしなかった。地震の時は自力で家の外に脱出した。道路は陥没し集落は孤立していた。地震の縦揺れの衝撃で、家の基礎の玉石は割れてしまった。後で見ると体育館の柱の鉄骨が曲がっていた。集落内に重機が四、五台くらいあったので道路はみんなが自力で直した。今でも家は、家族と犬が最低限生活できる程度しか直していない。

地震の時は、いつも吸っているタバコと車の燃料がなかなか手に入らなかったのが辛かった。

犬がいたため、体育館へは避難できなかった。自宅の車庫で一ヶ月半、二ヶ月くらい生活した。食事は避難所にもらいにいった。自分達でつくった食事はおいしいが自衛隊が持ってきてくれた非常食はまじかかった。二ヶ月後以降は元の家に戻った。

ボランティアはほとんど利用せず自力で片付けました。ボランティアより地域の住民とのつながりを大切にしていた。

田んぼで米を作るのが生きがいである。闘牛も楽しみにしている。また、追い追い家の周りのものを片付けていきたい。

地域の絆と故郷（ふるさと）が一番大切だと思っているので、地域外にいる子供たちのところでは住みにくいと思う。

## わが家の中越大地震

喜右エ門

星野 福太郎

家の中で妻と二人で一緒に夕食を食べていた。突然ガタガタと揺れ、

家の中に閉じ込められた。自力で外に出てみたら、戸が崩れていたり、ガラスが飛び散っていた。また、家が西のほうに一mずれていた。

地震直後の一泊目は隣の家の人が持っていたテントで一緒に生活した。二泊目はよろみ会館の前で野宿、三泊目から避難所となった小学校の体育館で生活した。

食事はちょうど野菜の収穫時期であったことと、おいしいお米があったため、不自由しなかった。

体育館で生活した後、空いていた木沢小学校の教員住宅にいらしてもらえようと思いし、入居できた。それからずっと、今も教員住宅に住んでいる。これまではただだったが、今年の四月から家賃を払っている。

避難生活で一番苦労したことは、トイレと水の確保であった。トイレは特に女性が大変であった。水の確保はホースを家まで引っ張ってくるのだが、すぐに断水したりした。横掘りした井戸は地震後二三日で出なくなった。

避難生活は体育館での生活だったので、隣の人の騒音などがうるさく、プライバシーが確保できなかった。

住宅はこの教員住宅で特に問題はないが本当は自分の家に住みたい。自衛隊が瓦礫の処理や水の支給をしてくれた。とても助かった。また、ボランティアは農業の収穫を手伝ってくれたり片付け、行事があると様子を来てくれたりした。部落の人達は、やる気をなくしていたが、ボランティアのお陰で元気がでた。

これからも農業を自分の手でやり続けたい。

## わが家の中越大地震

中村家持

星野忠雄

地震発生当時、私は木沢の区長を務めていました。今になって思えば、心配と不安ばかりが先走りしていたように思いますが、一人一人の安全

と共に、コミュニティとしての木沢のまとまりを考え、精一杯できる限りのことはしたと考えています。

本震が発生した時、私は水害の残務処理をしながら、一番下の孫と二人で居間のコタツに入ってテレビを見ていました。突然の激しい揺れと共に、テレビも灯りも一瞬にして消え、まさに「這う這うの体」で外に逃げ出しました。幸いにして、家族は皆無事でした。

私はとにかく集会所の「よろみ会館」に向かいました。思い出そうとしても記憶が定かでないのですが、集会所の鍵と幸一さんが預かっていた旧小学校の鍵を持って、何度もよろめき転びながら集会所に到着しました。まずは地区の役員に集まってもらい、これからの対応について相談し、住民の安全の確認と確保のため、全員に集会所前に集まってもらうことにした。その夜は、何軒かのお宅から持ってきていただいた薪ストーブや布団類で寒気をしのぎ、皆、路上で一夜を過ごしました。いざというときの、木沢の団結力を強く感じました。ただ、本当に残念に思うのは、消防団や若い人たちの努力もむなしく、星野ソマさんが亡くなられてしまったことです。

翌朝、木沢内の住宅や道路、畑などの被害状況、周辺の山肌の上砂崩れ跡を見たときには、大変な事態になったと改めて思いました。二晩の野宿生活の後、天候と住民の体調を考え、安全確認ができるまで待つようにとの役場の指示がありました。廃校となった木沢小学校の鍵を開け、避



田植え (川口町フォトコンテスト入賞作品)

難所となりました。結果的に正しい判断であったと今も思っています。木沢の人たちだけで始めた武道窪への道路修復工事のおかげで、三日目には車が通れるようになり、自衛隊による救援物資やボランティアの方たちも木沢に到着しました。そして四日目からは、町役場に区長として出席することが増えていきました。この間、看護師の方が交代で夜間も避難所を見回ってくれる体制ができるまで、私はほとんど眠ることができませんでした。結局、私たち一家全員は、避難所が閉鎖されるまで、体育館に寝泊まりしていました。

平成十九年八月、私たち一家七名は、東川口で新たな生活を始めました。しかし、私の農作業のための木沢通いは続き、時には弁当持参で木沢に泊まっています。私自身は、約四十年間、小千谷の農機具販売店や川口の農協に勤めながら、出勤前と帰宅後に農作業に携わってきました。今でも農作物を育てる楽しさと、自分の水田から魚野川や越後三山を眺める時の爽快感を失うことなく、想像することさえできません。生まれ育った土地というだけでなく、私は木沢にそれ以上の思いを抱いています。区長としての震災の体験は、その思いを一層強させてくれたと考えています。

## いつも変わらないな……

中村家持

星野克也

「いつもと変わらない土曜日、いつもと変わらない夕食」なんの前ぶれもなく、突然起こった。そして、すぐに停電になった。

最初は、何が起こったのか理解出来ず、無我夢中で家族と外に出て、周りを見てやっと地震だったとわかった。

地震発生直後より、集会所前の道路上に住民が避難し、焚火を囲み、寒さをしのいで夜が明けるのを待った。

地震で私たちの地区への道路が寸断され、孤立状態となり、他地区と

の行き来が出来なくなった。

食料は、各自持ち寄っても一〜二日分しかなかった。救援物資は、役場の方が途中から徒歩で持って来て下さった。それゆえに、誰となく自分たちで道路を復旧しようということになった。ある人は、復旧場所を下見に行き、ある人は、建設機械の準備をし、ある人は、避難所の移動・設営をし、ある人は、食事の用意をし、各自一人一人出来る仕事を見つけ、協力し合いながら頑張っていた。

そのおかげで、夜には軽自動車がやっと通行できる道路が完成し、救援物資も無事頂くことが出来た。

今回、この様な災害が起き、非難生活を送って、感じたことは、人と人との協力し合うことが大切だということだ。家族・隣近所・地区住民等々、様々な方々に大変お世話になり、無事に生活を送れている。

私も子供たちも、今まで何も不自由なく暮らしてきたが、今回身をもって体験し、感謝の気持ち自然とわいてきて、「ありがとう」という言葉の重みも、あらためてわかった。

最後に、沢山の方々、たいへんありがとうございます。そして、「いつもと変わらない土曜日。いつもと変わらない夕食」が送れる日が来るのを目指して、頑張っていこうと思う。

## 地震体験記

長兵衛

星野文江

ドーンという音と共に真っ暗になり、一・二秒後には激しい揺れ。一瞬何が起きたのか理解できないまま外にとび出し、お父さんと呼んだ。その後も、立ってられない程の地震が何度となく続くなかで、しばらく呆然としていた。屋根瓦が壊れてとんで来るので、危ないから車庫の前に移ってまもなく、すごい音と共に近所の池がやぶれて道路が川になり、激しい流れに変わった。少し落ち着いたとき、お父さんが薪ストー

ブの火を消さないと危ないと言うので、懐中電灯を探して中に入り火の始末をする。

しばらくしてから、隣近所の人と話し、みんなでセンターに集まった方がいという事になり、村中の人が一ヶ所に集まって点呼をとる。出かけて帰っていない人もいたが、お父さん達が何人かで村中を見て回る。そのうちに消防団の人からガスの元栓と、ブレーカーを切った方がいいという事になり、懐中電灯を持った人が手分けをして何人かで全戸を回る。私もお父さんについて一緒に行った。

集合場所に戻ってから、次は音蔵さんにすぐ食べられる物を何人かで取りに行き、せんべい、飲み物を分けてもらう。年配の人は夕食をすませた後だったが、まだ食事前の人が多く、でもお腹はすかない気がした。潰れた家の人を助けるため重機・発電機などの準備を整えて救出に向かったが、残念ながら亡くなっていた。家族が迎えに来て連れて行くと聞き安堵する。

とつてもきれいな星空の中、気温も下がり寒くなって家に着る物を探しに帰って着る。家の中はメチャクチャになって思うように引き出せない中、手当たり次第に掴んだものを着た。しばらくして座布団を取りにまた帰る。その夜はほとんどの人が眠れない一夜を過ごす。

朝になって鍋、ストーブなど出せる人が出して、朝ご飯と味噌汁を作る。湯飲みに少しずつだけ、みんなで分けて食べ、とてもおいしかった。徳助の井戸水で洗い物をしたり、食事の準備をしたり食べたり二日間無事に過ぎる。

夜は車を持って来てその中に寝る。三日目には雨が降るといので学校の体育館に引越す。男の人が武道窪への道を開通させるために夜まで頑張る、何とか通れるようになって、四日目から少し食料が届く。私達ご飯を作ったり配ったりだったが、そのうち三食届くようになり、当番でもらいに行く係を決めたり、盛付け配膳などが主な仕事。ボランティアで食事を作ってくれる人が来て感激した。

一週間後の日曜日、沙織、小津枝が来て片付けてを手伝ってくれる。

電気も水も充分にない中、家の片付けが始まる。上越の人も心配してかけつけてくれる。十一月三日にも片付けを手伝ってもらい、家の中は何とかきれいになる。上越の人はお昼を作って駆けつけてくれ、みんなでごちそうになる。すごくおいしい。片道三時間、本当に頭の下がる思いで感謝、感謝。見捨てられてはいないと思いい、涙が出る程嬉しかった。昼間は片付け・食事は学校で食べ、夜は車の中で寝る生活が三週間位続く。

## わが家の中越大地震

ウネ蔵

星野春吉

地震時は、家族と一緒に家にいた。孫が来ていたから焼肉をしようとしていた時に地震が起こった。「ザー」という音がして土砂崩れが起きた。そして上の方の池がやぶれて水が流れ出た。裸足で一度逃げてみんなで立ち話をしてから、家族と一緒にゆるみ会館へ行って、二日間ゆるみ会館の前の道路にブルーシートを敷いて過ごしたが、夜が怖くて眠れなかった。その二日間は天気良くて月明かりがあった。

しかし、三日目は天気が悪くなってきたため体育館へ移動した。土砂で道路が塞がってしまったが、私たちが道路で過ごした二日の間に、若い人たちが村にあった重機を使って迂回路を作った。

避難所での食料はみんなで持ち寄った。避難生活で一番大変だったことは、水がなかったことと、大勢で生活することだった。良かったことは、みんなが同じ気持ちになったことと、姉妹都市（狛江市）がどこよりも早く仮設トイレを持ってきてくれたこと、お風呂を持ってきてくれたことと、マットをたくさんもらったことだった。

ボランティアの方達は一人、三日〜一週間ぐらい滞在して活動してくれた。お医者さんが来てくれたことが嬉しかった。また、自分が疲れている時に雪かきをしてくれたことが一番うれしかった。

これから頑張っていきたいことは、地震で傾いた家が雪の重さで倒れ

ないように、雪かきをやっていくこと。一番辛かったことは、地震で田んぼが崩れて流されてしまったこと。

## 地震が残したもの

富蔵家持

間野慶作

十月二十三日の地震があった時、私と妻はちょうど夕食が終わり後片付けを始めた時でした。「ドーン」といような、下から突き上げる感じが何度かした後、激しい横揺れが続き、何が起こったのか最初分かりませんでした。

家の土壁は落ち、近くにあった戸棚が大きく傾きましたが、倒れなかったこと、今思えば幸いでした。これは地震だ！と改めて気づき、薪ストーブに水を掛け消し、ガスコンロの元栓を閉め急いで外に出ました。

外に出ると、道路をはさみ斜め上にある隣家の作業所が倒壊し道路側へ傾き、その近くの錦鯉の棚池が崩落、中の水が錦鯉とともにすさまじい勢いで道路に流れ出す、そんな光景が飛び込んできました……。

とりあえず近くの道路の少し広がっている場所に近所の四軒十二名が集まりました。それから、寒さをしのぎ一晚を過ごす避難場所を確保するため、若い世代の家族が持っていた、キャンプ用の大型テントを設営中には他の家から持ってきた豆炭ゴタツを入れ一日目の夜を過ごしました。二日目からは、皆がいる集会所前の道路の避難場所に合流し一泊、三日目からは雨が心配されることもあり旧小学校へ移動し、その後はそこが木沢・峠集落の避難場所となりました。

避難生活で大変だったことは、まず、百名以上と一緒に寝泊まりすることに慣れず、最初よく眠ることが出来ませんでした。また、当然のことながら風呂が無く、高齢の私たちは外に出ることもままならず、お湯を沸かしそれで体を拭く程度で、風呂に入ることが出来たのは一週間は経っていたと思います。トイレも使えず、三日目、狛江市の仮設トイレ

が届くまではいろんな方法で用を済ませましたが、届いた時は何かホッとした気がしました。

避難勧告の解除後は自宅に戻りました。自宅の被災判定は「全壊」でも住み慣れた家で住みたいと何とか応急修理を済ませ生活を始めました。瓦葺の屋根は、瓦が全て落ちブルーシートを掛けたまま大雪となった一冬を何とか乗り越えました。

農業での被害は、牛ヶ首集落の上にある作業場が道路法面の崩落と共に大きく傾き、使用が出来ない状態となりやむなく撤去。同じ場所にある田んぼもため池も亀裂や崩落で被害を受け、最初その状況を見たとき啞然とし、後のことは何も考えられませんでした。しかし、翌年十七年春、最初のため池を復旧、手作業で直せる範囲約一反に作付が出来、秋には六俵くらい収穫出来ました。そして収穫後に田の復旧をしましたが、ため池の容量もあり、被災前の半分程度しか復旧できず、残りは諦めることにしました。十八年春からは、それで米作りをしています。

震災の影響があった訳ではないと思いますが、その年（十八年）の検診で引っかけ手術をしました。今は何とか元気になりましたが、何か前とは違うような気がしています。「地震が来なければ」おそらく、私も木沢集落も、良きにしろ悪きにしろ今とは違った生活があったと思います。でも、この地震に対してさまざまな方面、ボランティアの皆様からの多くの支援をいただきました。また、この地震により強まった地域の絆やコミュニティは地域にとって大切な財産となると思います。

「いざとなれば何でもできる」地震の時の体験を忘れず、体の許す限り、木沢での米作りや畑作りにいそしみ、頑張って生活をしていきたいと思っています。

地震が残した爪あとを乗り越えることが出来た、多くの人との「絆」をかてとして。

.....

## わが家の中越大地震

四郎八

阿部 和雄

鉄塔の送電線工事の仕事をしていたため、自宅を留守にすることが多く、中越地震前も、埼玉県で仕事をしており、前日の二十二日金曜日の夜に帰宅していた。二十三日は朝から糊摺りの準備をし、午後一時過ぎから作業を始め、袋詰めまで終えたところで、残りは翌日にすればいいだろうと、午後五時前後にその日は切り上げた。

帰宅し、何種類かのおつまみを目の前に、缶ビールを半分ほど飲んだところで、突然下から突き上げられる強烈な揺れ、これはプロパンガスのボンベが爆発してしまったな、と瞬時に思った。その直後の今度は激しい横揺れで、初めて地震だとわかった。家には母親が寝たきりの父親に付き添い、私の妻は台所にいた。慌てないで様子を見るために、しばらく家の中に留まっていたが、続く大きな余震で危険を感じ、私は父親を背負って、全員が外へ飛び出した。

大阪に住む弟が贈ってくれた車椅子に父を座らせ、私と妻は家の中に戻り、毛布やら衣類やら、防寒に必要なと思われるものを散乱する中から探し出した。それから会館前に行ったが、その夜は何も食べなかったと思う。

翌日に、怪我をした星野カヲさんと私の父はヘリコプターで長岡の病院に搬送されることになり、正良さんと私がそれぞれに付き添って同行した。しかし、残した家族や家、田畑のことが心配だったので、私は大阪の弟に電話で連絡を取り、父親の付き添いに来てもらうことにし、正良さんと三日後に木沢に戻った。

家は大規模半壊、厳しい冬を越さなければならぬため、両親は弟に春まで預かってもらう事となった。しかし、年老いた父親は生まれ故郷に戻りたかったようで、一月十日の誕生日前日に、両親を迎えに行き、木沢に連れ帰った。

私自身は平成十七年八月のお盆前に長年努めた会社を退職した。お盆

明けに待ちに待った家の修復工事が始まるからである。大工工事の期間、父親は川口の「あおりの里」に預かってもらった。九月の彼岸までには父は戻ってきて、修理が完了した自宅で、盆に帰省できなかった弟一家とも十月はじめに会うことができた。弟たちが帰って三日後、父は静かに息を引き取った。

私自身、静岡の会社に勤めている頃、一家の長男でありながら、いや、長男であるからこそ、一家のために木沢を離れることを考えたこともあった。しかし、父があればどこまで戻りたがった木沢を、自宅を守るため、勤めをやめて木沢に戻ってきた。震災直後に木沢の皆さんの理解を得て、いち早く修復工事ができたわばかりの水田で米を作っていたいながら、木沢の住民として将来を見据えながら、皆さんと共に地域の活動に参加していきたいと考えている。

## 平成十六年十月二十三日大地震・その時私は

甚平家持

星野 藤一

私は去る日の十六年十月二十三日、川口温泉に行つて居りました。当日朝方川口に下り私どもの同級会が計画され、川口のフクヤさんへズボンを買に行き、少し丈が長いので夕方までに直しておくとの事で、夕方それを取りに行きました。その帰りに前日まで農作業の手伝いをして体も汚れているので、湯に入つてきれいにして家に帰る予定でおりました。大勢の車と客で湯はいっぱいのようなのでした。午後五時五十分過ぎ、体も洗わないうちにドカーンと何か全体が浮かんできた気がしました。そして揺れが始まり段々と強くなり入浴者は風呂から逃げて行く。オレもすぐ脱衣所に行き荷物を見つけ、薄暗い廊下を逃げ、やっと外に出ました。大パニックです。大勢の温泉客が思い思いの方向へ逃げる状態でした。

まだ仲間が見えなくて探す人で大騒ぎです。自分も手伝う事はやりませんでした。厨房からヤケドをした人が助け出され、一人が阿部信子さんとの

事。ヤケドは水をかけた方が良くと阿部さんを励まして、玄関ではおばあさんが下駄箱の下になり、助けを求めているので何とか助け出しました。現地は大パニック、そしてオレは明日の同級会の話と阿部さんの母さんのヤケドの事で何とか連絡しようと思いいバイクで竹田から牛ヶ首へ走り、掘割り近くにきたら道路が崩壊、寸断されて通行不能になっていました。Uターンしてまたサンローラへ戻る時は、前と違って段差が出来、ゴルフ場辺りに来たら電柱が倒れ電線がぶら下がっていました。上に気を取られて路面の段差にぶつかり、転倒して右足を強く打ち、何とかサンローラに着きました。

大騒ぎです。野宿の準備、ふとん出しを手伝い、火たき、一睡もしなく夜が明けました。人員の確認をして朝礼をし、二十四日朝九時過ぎに何とか歩いて掘割りに来て、車で木沢に到着しました。村の人はお前がないから死んだと思っていたが、良く生きていたなーと言われました。村の人も二晩野宿をして、三晩目から学校体育館に避難を始めました。そして武道窪廻りの道路づくりから自衛隊の炊き出し、大勢のボランティアの応援を頂き、大分復興して頂きました。

まだ元には戻らないですが、今まで応援してもらった方々に今一度お礼を申し上げます。本当に有り難うございました。木沢に来たらお立ち寄り下さい。川口町を応援有り難うございました。

## 三年過ぎた中越大震災

四郎右エ門家持

星野 秀雄

十月二十三日 午後五時五十六分

その時私は一日の仕事を終え食卓に向って一杯を飲むとした瞬間、屋根に脇の杉の木が倒れかかった様なドカーンと大きな音がしたと思うと同時に強い揺れに見舞われた。これは地震だと思いい危険を感じ必死に外へ出ようと立ち上がったものの、立つ事すら困難で柱にしがみ付き揺

れの終りを待った。

妻は食器棚と冷蔵庫に挟まれ、年寄はタンスの下敷き（幸いにしてタンス転倒がコタツに添いかかり難をのがれた）、嫁と犬は二階で無事暗闇の中散乱した障害物を除けながら脱出、一安心した。しかし利夫が仕事先から帰宅してない。連絡は不能、心配でたまらない気持ちでした。夜十二時頃、川口から一人で歩いて帰宅した時、家族皆んな無事であった事が三年過ぎた今でも思い出され、恐怖と安堵を感じます。

### 避難生活

そして地区全員

一ヶ所に集合して二日二晩、焚き火で暖を取りながら野宿。幸いにして天候に恵まれたが深夜になると冷え込み、皆んなで助け合いながら凌いで。地震発生から三日目からようやく旧学校体育館で避難共同生活を余儀なくされ一ヶ月間過ごした。その間全国から色々な方々から支援を賜りました。その有難さというもの本当に身に余る気持ちで一杯でした。心から厚く感謝を申し上げます。



震央地での田植え

又共同避難生活で融和が非常に良かった。いかに日常の助け合いが大事であるか教訓となりました。

私のおどろき

中越地震震央地が気象庁で発表された。

北緯三七度一七分三〇秒、東経一三八度五二分の位置が、実に私が耕作している田んぼの真中とはこれまた驚いた。震災一周年を迎えた十七年十月二十三日、震源ハイキングが実施され、川口小学校の皆さんのメッセージが書かれた標柱が建てられ記念された。県内外より視察者が訪れ農作業をやりながら当時の説明やら又、方々の人達と対話を取りながら交流が出来、私として明日への希望が湧き、勇気付けになります。

農地災害復旧が進み、地震発生二年目より徐々に稲作を頑張っています。

## 【二〇〇四年十月二十三日(土)】

### ……二十四時間ドキュメント

観音

阿部 義夫

もし地震がなかったなら、どこの家でも秋の収穫に余念がない毎日であった。また多くの仲間が村を離れてしまう様な事も無かったはずである。ところが夕方の五時五十六分、震度七という恐ろしい大地震が発生したのである。

当日オレは、朝から一人で前日外したハザ稲の脱穀作業に追われていた。夕方になっても終わらず、灯りを付けてでも終わらせるべきか……実は迷った。明日は日曜日、子供が手伝えば半日でハザ縄まで外せると思い、家に帰ったのです。

夕食を作り居間に運び再び台所に入った瞬間、ドーン、ギシギシグラグラと来た。まさか！の大地震が起こった事に気付く。この時風呂場に

一人、居間に一人居たのです。家が潰れる、とにかく外へ出よう！と声掛け合い、まさにパニック状態でありました。皆が無事であればと、ただそれだけを祈りながら、センター前に集まる事にした。住民同士が、隣近所の顔を確認し合いながら、村民皆が寄り添ったの避難である。

治まる事無く続く揺れで脳裏をよぎったものは、もし脱穀を終やそうとして続けて居たら、川向こうで崩落した土砂の下に車ごと埋まり、助



迎山のはざ場

け出されることは絶対になかった事である。余震に関係なく身が震えた。明暗の分岐点は「明日があるさ明日がある」だったのか。オレはこの歌が大好きだ……書き尽くせる事ではないが、一頁に残したい。

・通信網が混線状態で情報を伝える事も全く出来ない。妻と娘は無事なのか。

・道路が途中で崩落していて、そこから歩いて来たとの話が入り、他もひどいなと感じる。

・政兵衛の久子さんが、妻の信子が火傷で重症だと、知らせに来てくれた。一番気掛かりであつた妻と娘の安否……その妻が職場で火傷との知らせである。

・消防団出勤で出て居る息子に伝えてもらったが、真っ暗闇で分からずそのまま町へ下る。

・竹田く川口間は、事情を知つた前田の六雄さんが俺を車に乗せて下へ降りてくれた。

・末広荘駐車場には、町内大勢の皆さんが集まって居たが、全く分からない状況であつた。

・朝方、長岡市の日

はざ場に向う橋が崩落していた



はざ場に向う橋が崩落していた

赤総合病院へ深夜救急隊員に搬送された事を電話でようやく確認できた。

・直ぐに娘の避難先、小千谷へ歩き、そこから通行可の道を辿りながら日赤総合病院に着く。

・十一階の病床に妻がうつ伏せ、傍らには中山の佐藤道子さんが付き添いで居て下さった。

・村は孤立し木沢会館前の路上で二晩、三晩目に場所を体育館に移し避難生活開始となる。

・地震発生直後より、必死で助けて下さった皆さんや、全国各地からの派遣職員、自衛隊、多くのボランティア各位の絶大なる支援に、頭の下がる思いでいっぱいでありました。

その一部の記録を後生に伝え、生涯忘れず健康の限り少しでもご恩返し出来ればと思う。村に残った住民が融和をもって都市部との交流も視野に広げ、寝たきりゼロであり続ける元気な村づくりが出来たらいいなと、それだけが願いである。

## 地震さえなければ

十二ノ脇

星野正良

仕事から帰ってすぐ風呂に入り缶ビールのみながらくつろいでいた。その間、母は入浴中だった。突然の大きなゆれと共に、テーブルの上の物がひっくり返り、廻りの物が倒れた。今まで経験していた地震とは違い、家が今にも倒壊すると恐怖を感じ、とにかく入浴中の母の元へ。身動き出来ないでいた母をとにかく外へ連れ出した。その際散乱している所を出たので、すべて転んで手首をいため、足のあたりからも血がにじんでいた。外へ出ても大きな余震が次々と続き、大きなゆれの中で家はたえてくれた。

その後センター前の道路のまん中に集まり、点呼をとっていた。そこ

で久治さん宅が倒壊してお母さんが下敷きになっているけど、余震が納まらなければ助けられないと聞き、その後救出したものの死亡されたことを聞いた。又、観音様の信子さんが温泉で働いていて、大ヤケドをして病院へ搬送されたこと、まだ仕事等で帰ってきていない人もいて、明日になればどんなことになっているんだと思った。

夜も余震が続き、不安の中、身をよせあい、ラジオの情報だけがたよりのだった。朝、明るくなって目にしたのは、長左エ門の車庫と晋さんの作業場が倒壊している光景だった。その後誰となく川口山の先の道路や牛ヶ首の道路がおちて車が通れない、金比羅の山や東向きの山がくずれている、田んぼのノリ面が池が……井戸水が出ない、電話が……次々に被害が伝わってきた。俺もまず家と田んぼの状態をたしかめたいと見にいつてきて、どこから手をつけていいのやらと思った。母のケガも心配だったけど、こんな状況じゃどうにもならないと思っていいたら、いろいろな方から心配していただき、自衛隊のヘリを要請していただき、四郎八のおやじさんと共に長岡の病院へ行くことが出来、皆さんに申し訳ないと思った。いっしょに病院に行ったので、二三日部落のことはわからなかったけど、その後すぐ村の人達は川口まで行けるよう道路の復旧作業にとりかかったと聞いた。

あの日以来いろんなことがあった。いろいろ助けられながら、今までの生活を少しでもとりもどすためにがんばってきた。しかし、やむを得ずふるさとを去った人もたくさんいて変わってしまった。あの地震さえなければと……三年目にしてもまだその影響をひきずりながらの日々である。

.....

## 忘れられない中越大震災

ガニワラ

星野正孝

中越大震災から三年目になろうとしています。思い出したくないと思っても心の内に残っています。

夕方野良仕事を終え家に帰って風呂を沸かしながら、夕食作りを始めました。子供を風呂に入れ、再び食材を鍋に入れ煮ている時でした。足元から突き上げられるように、ドスンと一瞬何が起こったのか分からなくなり、電気が消え、真っ暗で何も見えない中での、物凄い横揺れで初めて地震だと気付きました。

回りの家具類が次々にひっくり返り、身動き出来ない位でしたが、揺れの治まりを待って懐中電灯を手にし、子供と一緒に足元、周りに注意しながらやつの思いで外に逃げ出す事が出来ました。外では近所の人達と一緒に、とりあえずセンター前に集合する事にしました。そこで住民皆が無事かどうかを確認し合うよう指示があり、声を掛け合いながら確認を取り合った。次々と集まってくる住民、余震が続く中での避難生活が始まりました。

夜が明け周囲を見て歩く中で、山崩れや道路の至る所に地割れが出来ており、生活道路も数か所が寸断されておりました。町からの指示があり、旧小学校が避難所となり、各方面の方々から、手厚いご支援をいただき、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

避難生活の中では、小さな子供から、お年寄りまでが健康に気を配りながらお互いに協力しあいながらの毎日でした。自衛隊、各方面からのボランティアの皆様の大きな力添えにどれだけ心強く感じた事か……思い出している今日この頃です。

避難解除になって、我が家に帰っての片付け作業に明け暮れる毎日でありましたが、何とか片付けが終わり、家族揃って食事出来た時が一番心の休まる思いを感じました。

またこの冬は大雪となり、雪の重みに家が軋む音で眠れない夜もあり

ましたが、家族が皆元気で過ごしている今日です。

## わが家の中越大地震

又蔵

星野サト

中越大震災が起きた時、自宅には私ひとり、流して鍋を洗っていました。身体が浮き上がり、後ろに倒れたほどですから、相当の揺れだったと思います。台所で火を使っていなかったのが、不幸中の幸いでした。最初、玄関から外に出ようとしたのですが、冷蔵庫が倒れていて通り道を塞いでいたため、裏口からたまたまそこに置いてあった長靴を履いて、やっと外に出ることができました。時折、大きな揺れが続いていましたが、ブレーカーを落としたり、外はだいぶ寒くなっていたので、布団の中から薄がけを取り出すために家の中に入ったりしました。

三日後の十月二十六日に、小学校体育館での避難所生活が始まりました。私はひとり暮らしてあったため、福松さんから塩沢の娘夫婦に電話するようにご心配いただきました。そして、十一月、和南津のトンネルが通行できるようになってから、その娘たちが迎えに来てくれました。塩沢の娘のところに行くにあたって、持って行ったものといえば、自分の衣類それに仏壇の位牌と本尊、過去帳くらいのものだったと思います。家は南東に傾き、冬の雪下しが心配でしたが、屋根に上がることは大丈夫と専門家が言っていたので安心はしました。冬の間、休日に塩沢から自動車ですべてもらい、被害を受けた自宅の片づけをしました。しかし結局は、解体する決断をし、その作業をガニワラの次にお願いしました。解体前にガラスはすべてはずすように言われたため、それが結構大変でした。まだ使えるものは、広神の娘たちところにも持っていったもらいました。長年住み慣れた家ですから、それはさびしい思いでいっぱいでした。

塩沢の娘夫婦に世話になることもできたのですが、近所に茶飲み友達

も居なかったり、一人で暮らすことの気楽さなどを娘たちも理解してくれたので、木沢に戻ってくることは、早くから決めていました。私は二十四歳で木沢に嫁いできたのですが、年を取ると、何かと近所の方のお世話になることが多くなります。そうなると、皆を知っており、長年住み慣れた木沢が一番気楽です。畑作業も大きな楽しみの一つです。年寄りの一人暮らしを心配した子供たちが、オール電化のカマボコ型の家を再建してくれました。冬の雪下しの心配ありません。しかし冬場は、十一月から春の彼岸まで、塩沢の娘夫婦のところを寄せ、また木沢に戻ってくるという生活を続けていくつもりで居ます。

## 大地震　そして未来へ

木挽(コビキ)

小林 正利

平成十六年十月二十三日午後五時五十六分、大音響の地鳴りと共に直下型地震発生。まさか我が地に？　三年後の今思いも新たに時を振り返り記憶を蘇らせない。

秋の収穫作業も一段落し、星野春吉氏宅に農日料支払に訪問。勘定支払い、椅子に座り焼酎を戴く。会話中凄惨な地鳴りと共に五十センチ宙に浮く。テポドン来日か？　速、自宅に急ぐ夕暮れせまる中、映画のワンシーンの様だ。裏に回りプロパンガスの元栓をしめる。こんな山地にナマズ君は我が地を選択したのか？

我が家は仕事で誰も居なかった。居れば倒れた下敷きになって、怪我で済むか又はなんとも言えない。無事である事が後でわかった。不幸中の幸である。

鉄塔、電柱は倒れ、通信網不通。道路は寸断、集落はついに陸の孤島となる。どこにも車で行けない。しかし自分の足がある。誰かが重機を手配、段取り、幹線道路開通を目指し木沢一丸の復旧作業。開通、車で行ける、団結の力ここに現れる。開通バンザイ。

直後路上生活二日。晩秋の夜は寒い身に凍る。旧木沢小学校体育館に避難命令、家に帰れない。絶え間なく続く余震。不安に脅える。人生、あんな坂、こんな坂、まさかの坂があると言う、誰が想像出来ようか。

解除迄に早く家の中を片付けなければ住めない。長女夫妻も横浜より手伝いに、妹夫妻も助かる大物を片寄せ、畳をはぎ、残り物を落とす。板間を角スコップでまとめ、箕で外にまとめ、掃除、新聞紙、畳を敷く。ビリビリの障子戸を外し、張替百枚、ようやく住める安堵。四十日目避難命令解除。懐かしの我が家に帰宅。

長い避難生活の中で、自衛隊、数多くのボランティアの方々のお陰で物心両面にわたって助けられ、日本人の優しさと、温かさに心した。テレビも見られ、電話も、新聞も、報道関係者も、地震一色である。校庭はごった返す。

私は、新聞の一つの記事に注目をした。数々の励まし激励の中、この文面に見入った。

題目は「志のある人よ　再起目指して」(平成十六年十二月一日　新潟日報二十八面、窓らん)

「志のある人よ　再起目指して」

佐藤 正喜(46) 団体職員(新潟市)

被災直後に全村避難を決断しながら、すぐに「皆で村に帰るんだ」と村民を励まし続け、防災服で各所へ陳情に出掛ける山古志村長に強い意志を感じます。

養鯉や闘牛を続けたいと、困難を切り開いて村に向かった皆さん。大切な農地をズタズタに切り裂かれながら、来年の米作りを願う小千谷市、川口町を中心とするたくさんの農家の皆さん。そして、再起を目指す企業経営者や商店主の皆さん。自宅に戻られ、または仮設住宅への入居が進みつつある現在、次に控えているのは皆さん自身が生業(なりわい)を取り戻すための数々の困難でしょうが、どうか

気持ち強く持たれますように。

「志のある人は、決してあきらめない」私が師から教えられ、いつも傍らに置く言葉を、今こそ皆さんへのエールとして送ります。

この文面は一生忘れる事なく心に刻む。

佐藤氏の思いを私なりに理解し、地震の体験を生かし限りある人生に挑戦をしたい。

## わが家の中越大地震

藤 歳

星 野 クラ

自宅で被災した。夕食時であったため、私は食事を摂った後に大きな揺れを感じた。夫も自宅に居た。私同様、夕食時だったため、お酒を飲もうとした時に地震があった。

部屋の片隅でじっとしていたが、戸が外れ、頭に直撃した。その直後に座布団をかぶり外へ出た。

夫は黙って外へ出ていた。正直驚いた。「夫は自分の事なんて考えていないのでは？」と疑った。

外へ出ると近所の方が「大丈夫ですか？」と声をかけてくれたのがとても嬉しかった。電線の下にいたので、消防団の方から、「センター（よろみ会館）へ避難してくれ」との指示があり、それに従い避難した。

避難生活では、トイレが一番困った。自分の土地に穴を掘り用を足そうとしたが、やはりできず、便秘になってしまった。寒さも厳しく、センター前の道路で皆集まって火を焚き夜を明かした。

皮膚病である夫が大変だった。風呂に入れず悪化することが懸念されたため、避難所の小学校で水をもらい、夫の背中を濡れたタオルで拭いてあげた。

若いボランティアの方が家の障子を貼ってくれて助かった。そのボランティアにはお菓子やお茶を出してあげた。声を掛けてくれた方が大根洗いを手伝ってくれたので、野菜をプレゼントした。

今後、若い人達や周りの人々に迷惑をかけないように夫婦寄り添って生きていきたい。

## わが家の中越大地震

ミセ

星 野 武

自宅の居間で被災した。しばらく動けなかった。妻と犬は居間にて被災した。私と同様でしばらく動けなかった。

夕食を済ませた後に地震が発生したので、妻と犬と外に出た。足の踏み場がなく、犬は何処かへ行ってしまった。その後、よろみ会館前へ移動した。妻には「自分についてこい」と指示した。

よろみ会館前には人がいた。やはり他の人々と同様に火を焚いて過ごした。他の家の地下水（井戸水）は止まったが、自分の家は止まらなかった。（冬場は助かった。）食事は皆で持ち寄り、しのいでいた。

寝る場所に苦労した。初めはよろみ会館前の道路で過ごした。避難して、家の事が心配で仕方なかった。

色々大変だったが、周りも同様に困り大変な時だったので、困っている事が当然だと思っていた。

ボランティアとして、看護師の訪問ボランティア、自衛隊の炊き出しには本当に助けてもらい感謝している。他の地域に住む子供や若い人達が、自分が避難している間に家の後片付け、障子の張り替えをやってくれた。

頑張りたいというよりも、もう二度と地震に遭いたくない。思い出し話していると辛い。今回の中越沖地震でも柏崎市の様子を見ると思い出して心が痛む。あまりこういう話はしたくない……。

## わが家の中越大地震

為吉 星野 主税

自宅の台所で夕飯の準備をしていた。一人暮らしなので家族はいない。地震の際、電気が消えた。ガスの元栓をしめた。

ケガは無く、家にも大した被害は無かったので、近所の人達はよろみ会館の前で野宿をして二晩過ごしたが、私は自宅で過ごした。

避難所で炊き出しの準備をしていて火を使用していた時に余震があり大変だった。電話が使えず、水道も使えなかった。溜池の水を使い、食事はよろみ会館前の炊き出しをもらって食べた。

みんなよく働いてくれた。皆、頭の回転が速く、若い女性の方もいたので、細かい気遣いもできていた。

この集落は高齢者の比率が高いが、いつまでも健康で酒やタバコを控えて、人の迷惑にならないように生活したい。

地震後集落の人々はだんだんと離れていった。子供のいる家庭は都会へと引越した。そのため、子供の声が聞こえなくなり少し寂しい。

## 俺の中越大地震

四郎右エ門家持

星野 隆一

中越大地震の時、俺は消防の幹部研修で富山へ行っていた。地震を知ったのはバスの中だった。取引先である山梨の業者からの電話で、「お前の家大丈夫か」といきなり言われた。何が何だかわからなく、「何が？」と聞いた。そうしたら「大きな地震があつて大変なことになっているのをテレビで見た」と言われびっくりした。

バスの中ではまだ誰一人として知らなかった。すぐ家に電話をしたら幸いにもすぐつながった。家の中はぐちゃぐちゃで足の踏み場もない状態で、部落の人皆が集会場の前に集まっている事、家族は全員大丈夫で

あることを聞き一安心した。

バスの中にも少しづつ情報が集まってきた。時間が経つにつれ深刻さが増していった。それからは早く家に帰らねばとの思いでいっぱいだった。

木津までは何とかバスで来れた。木沢に着いたのは朝の三時ごろで竹田を過ぎてからは、ずーとヘリのライトに照らされながら歩き、道路の陥没や亀裂、それに夜中なのにヘリが飛んでいる事からよっぽど酷いんだなと感じた。

村に着くと全員が焚き火の周りに集まっていた。家族の顔を見ても一安心した。

朝を待つて家を見に行った。家を見るまでは怖かった。家が見え、建っているのを見ても、「おーよーし」と思った。さすがに家の中を見たらすごかった。あまりにも状況に言葉が出なかった。

みんなの所へ戻りまず何をしようかなと考え、電気が欲しいと思い、トラックに積み込んである発電機を持ってきた。昼間であったが、とりにあえず回した。最初に使ったのが携帯電話の充電である。あつという間に十台近く集まったのは驚いた。夕方は早めに電気をつけ暗く不安なことのないようにと思った。

テレビでよく災害が報道されるが、まさにわが身に降りかかるとは想像もしなかったことである。本当に貴重な体験をしたものである。

## わが家の中越大地震

銀 蔵

星 野 幸 一 郎

地震が起きた時私は、自宅で客人と焼酎を飲んでいました。妻は台所でてんぷらを揚げようとしていたが、まだ、油の準備をしていなかったのので助かった。私と客人にも幸い怪我はなく、無事であった。

揺れが収まった後、家自体にはそれ程大きい被害はなかったが、一部の壁が剥がれた。私は客人を送りに外へ出た時、道に水が流れているのを見て、自宅近くの池が、一部崩れた事を知り、家に被害が及ばないかと心配したが、それ程、被害は受けずに済んだ。妻は裸足で外に飛び出した。自分が裸足である事に気付かない程、気が動転していた。そして、数回余震があった後、ようやくその事に気付いたらしい。

自分の家には大きな被害は出なかったが、地震の影響で電気・ガス・水道が使えなくなったため、よるみ会館に行った。そこで、大変だったことはやはり水がなくて、トイレなどに使うことができなかったのが苦労した。よるみ会館では薪を燃やして二晩過ごし、それから廃校になった小学校に移った。小学校の方では十一月の終わり頃まで過ごししたが、一番大変だったのは洗濯機が使えないため、いけすで洗わなくてはいけなかったのが大変だった。他にも集落のほとんど全員が避難していたので、人が多くて大変だった。しかし、自分達の知り合いばかりだったので、気は楽だった。しかし、避難所ではやはり一人でいるより多くの情報が入って来た。

みな知り合いなので安否確認もすぐできた（誰がいないかすぐ判った）。私の家は大きな被害を受けなかったが、ボランティアの人達の数自体はかなりの大人数が来てくれた。そこで私は避難所に来たボランティアの方々に焼酎を振舞った。ボランティアの方も喜んでくれた。そして、その中でも特に仲良くなったボランティアさんとは、今でも手紙のやり取りをしたり、中越沖地震の時に真っ先に電話をかけてくれたりと、未だに繋がりがあある。これからも特に頑張らずに今の生活を続ける。

## 村人の絆

万 七

星 野 智 恵 子

激震の地に野宿して月寂し

大地震禍村人叫ぶ闇夜かな

中越地震が起きた平成十六年十月二十三日は土曜日でした。土曜日の夕方六時、私には楽しみにしている『人生の楽園』というテレビ番組があります。その日も、二階のテレビの前に座り、番組が始まるのを待っていました。

突然の轟音。部屋の真ん中に下がった照明器具が落ち、真っ暗闇。激しい揺れで、家の障子や戸が外れて倒れ、壁も落ちるし、これはミサイルが飛んできたんだ、と私は思いました。

やっとのことで一階まで下り、素っ裸のまま風呂から飛び出してきた夫の服を探し出し、ガラスの破片も散乱する中、何とか玄関のわずかな隙間から二人で外に逃げ出しました。

暗闇の中、まず欲しかったのは灯りでした。仏壇にはロウソクがあるはずだと再び家の中に戻ったのですが、偶然に踏んだ小さなライトから放たれた光に救われる思いがしました。

地震当日のことで、忘れられないことが二つあります。

ひとつは、亡くなられた星野ソマさんのことです。私は木沢の新聞配達を二十年ほどしてきています。毎朝五十軒ほどを配り、一番最後にソマさんの家で、パンとコーヒーを頂戴しながら世間話をするのが、私の一日の始まりでした。その日、ソマさんから「お寺に行って杖を取ってきてくれないか」と頼まれました。数日前にあった法要のときに、自分の杖を忘れてきてしまったのだそうです。「私が取ってきてあげます。でも、お寺が留守だったら、そのまま帰るね」と言っただけでした。お寺は留守だったので、ソマさんと言葉を交わしたのは、それが最後となってし

まいました。ソマさんからはいろいろなことを教えていただき、本当に感謝しています。それだけに、助け出すことができなかつたことが、今でも悔やまれてなりません。後日見つかった杖は、ソマさんと親しかった友人の方に送られたそうです。

もうひとつは、棚田の写真を撮るために、栃木県足利市から私の甥が連れてきた一行のことです。そのグループは、私の家でお昼を食べた後、塩谷や山古志の棚田を撮影し、小出に向かう予定でした。地震が発生した当初は、我が家のことやムラのこと頭がいっぱいでしたが、集会所前に皆が集まったときに、このグループのことを突然思い出し、五日後に甥と連絡がつくまでは心配でなりませんでした。

二晩の野宿、小学校体育館での避難所生活、そして仮設住宅。いろいろな方々に支えられつつ、私も、特に一人住まいのお年寄りたちのお世話をできる限りしながら、がんばりました。改めて思うのは、「人のつながりや、普段のつきあいの大切さ」です。そして、これからも私の好きな『人生の楽園』に紹介される方々のように、常に夢に向かって生きていきたいと考えています。

## わが家の中越大震災

万平

星野善辰

平成十六年十月二十三日午後五時五十六分、風呂に入り着替えに二階に行ったとたん、ずしーんと落ちる様な揺れがあり、急いで下に降り、台所の家内に火の元に気を付ける様言いつけ外に出ました。

道路に近所の人と避難している中でも大きな揺れが何回もあり、その後センターに集まる様言われ、二晩野宿し、三日目から旧校舎が避難所となり、各自布団を持ち寄り、十一月十六日迄お世話になりました。村の若い人達、自衛隊、ボランティアの人達、全国の皆さんにお世話になりました。本当に有難うございました。

その後しばらくして家に帰ってみると、中はめちゃくちゃ、家全体が十センチメートルも東側へ移動して、大規模半壊、山へ行つて見ると、田も池も皆谷底へ落ち、農業用水は皆出なくなっていました。又十日も学校にいる中、肩が痛くなり、食事の時は箸が口に届かなくなり、病院に行つたり、あんまに行つたりしたが、肩が良い時は膝が痛くなり、中々治らない。

平成十七年と十八年は復興復旧で業者の人達で村中一杯でした。お蔭で出来る所は皆出来上がった様です。私共の山道も十八年の秋には立派に直して頂きました。

無限に流れ出ていた井戸水のなくなつた事、復旧の見込みもない、田や池は悲惨ですが、七十年通い慣れた作場に行かれる事に感謝し、寝たきりにならぬ様、頑張りたいと思います。



## 中越地震を経験して

伴歳

小林恵子

あの日は土曜日で、夫と私は仕事が休みでした。いつもなら六時過ぎにならないと夕飯にならないのに、終っていた。七時から木沢焼きの窯たきの打ち合わせ会をやる事になっていた。夫はテレビを見ており、ばあちゃんは、自分の部屋にいた。私は昼間とったあまんだれ(きのこ)のゴミを台所ですべて取った。突然ものすごい音と揺れで体がとばされた。電気も消え、何がおこったのか訳がわからず、「どうしたがん」と大きい声で叫んだら、夫が「地震だこてや」と言った。その間もものすごい

揺れが続き、台所から手さぐりで出てきて、二階に上る階段の下に一旦夫におしこまれ、数分じっとしていた。その後夫は、ばあちゃんに声をかけ部屋からつれ出してきた。あとでできた話では、洋服ダンスがたおれてきてもう死ぬかと思っただけ、丁度すき間ができて助かったと言っていた。その時は助かったのに、二年後病気になる八十才で亡くなってしまった。

外へ出たら近所の人達も出てきて恐がっていた。立っていることも出来ず、みんな地面にすわって丸くなっていた。電線がものすごい音を出して揺れていて、切れるんじゃないかととても恐かった。どのくらいだった頃か、男の人の声で「集落センターに集まって下さい。」といわれ、みんな早足で行った。シートをしいて点呼をとったら、何人かいなかったけど、どこへいつているのかわかり安心した。そんな中、一番下の家の万平家持のばあちゃんが家の下じきになり亡くなったと聞かされ、本当にびっくりした。その後観音のお母さんが温泉で熱湯をかぶり大ケガをしたときかされた。心配だったけど、どうすることもできなかった。その夜は揺れが続き、みんなが寝れなかった。朝明るくなってまたびっくり、目の前の山という山がみんな崩れて山肌が出ていた。家に帰って見れば、畳という畳が見えない程物が散乱していた。まず食べるのが先決なので、野菜、米、冷蔵庫の食材を持ちより、自衛隊の人達が食事を作って持ってきてくれるまでみんな頑張った。そのあと救援物資もどんどん届き、食べ物心配がなくなった。ボランティアの人達も大勢来て手伝ってくださったので、やっと家の片付けに入ることができた。約一カ月近くで避難解除になり、家に帰ることができた。初めは静かすぎて眠れなかった。

まだ地震前のような気持ちにはなれないけど、前向きに生きていきたいと思っています。地震を体験して全国の皆様の温かい御支援、本当にありがたく一生忘れないようにしたいと心から思っています。木沢に残った人達で元気出していきましょう。

## 或るひとりの新聞記者

坊村 星野 靖

震災翌日、まだ道路はあちこち崩落していて、木沢集落は完全に孤立していた。

そんな中、或るひとりの若い新聞記者が、取材にやって来た。残念ながら彼の名刺を無くしてしまい、名前も社名も忘れてしまった。朝日か毎日のどちらかだったのだが……。

彼は横浜から来たと言った。長野方面を乗り継いで、電車とタクシーで、何とか堀之内迄は来られたと言う。だが、そこから先は道なき道を歩いて、ようやく木沢に辿り着いたという訳だ。他にも被災地はいくらでもあったのに、だ。彼が持っていたのは、カメラと手帳だけ。写真を数枚撮って、申し訳無さそうに取材していた。彼はその日のうちに、また同じ道を歩いて帰って行った。

彼の記事は、後日読んだが、紙面のほんの一部分、僅かなものだった。その後、木沢の住民は自力で道路を復旧させ、多くの報道関係者が押し寄せた。そして報道は大々的に伝えられた。けれど、最初にやって来た、若い新聞記者には、誰ひとりとして敵う者は居ないに違いない。

.....

## 中越地震から三年……

四郎右門

星野隆則

十月二十三日、当日は上越市で午後五時三十分まで仕事をしていました。仕事を終え、一人で軽トラックを運転し、上越インターから高速道に入りました。それから僅か十分程で地震が発生したのである。

最初、地震とは思わずタイヤがパンクしたかな、という感じであった。走行は出来たので、とりあえずそのまま走る事にした。車のラジオが故障し情報も聞けないし高速の電光ニュースも地震情報は出ていない。だが車の通行量が上下線ともガクンと減り、なぜか不吉な予感がした。柏崎インター出口近くまで停滞していることに気付き、一つ先の西山インターで下りた。ここでもやはり、出口から渋滞に巻き込まれてしまった。余震と思われる大揺れの後で、対向車の人から「小千谷地震だって」と聞かされた。西山インターを降りたものの、一般道をどの程度進めるのかが心配であった。小千谷に入って橋を渡っている時、大揺れの強い余震に恐怖を体験した。トンネルを出て木津に差し掛かったところで国道十七号が通行止めとなっていた。旧十七号の空き地に車を止めて、そこから家まで歩く他ないと覚悟した。

徒歩で木沢に向かう途中、陥没した道路、倒壊した家屋等々凄まじい光景である。両親の身が気掛かりでならない……木沢に到着出来たのは夜八時頃だった。その時はもう全住民がセンター前に集まって居た。そこに両親がケガもなく無事にいたことが、なによりうれしかった。この事を兄弟に知らせようとしたが、携帯が繋がらず連絡が取れなかった。

夜中になれば寒くなると思い、家に行き家具の散乱している中に入り衣類を持ち出す。すぐに避難所に戻り、親・親類に手渡す事が出来た。しばらくしてから菓子など口にするものが少しずつ配られた。村は孤立し、余震の続く中、この夜から二晩センター前で身を寄せての避難である。三日目から旧学校体育館に場所を移し避難生活開始となった。

今現在は家を修復して親と一緒に住んでいるが山小屋は倒壊したまま

だ。田んぼの一部を復旧したが、野菜を少し作っている程度である。これから先の目途はついていないが、もう暫く時間をかけて決めたい。地震発生直後から村中の人が助け合ってここまで来れたが村を離れた家も多い。そして自衛隊や県内外から多くのボランティアの皆さんから大きな支援を頂いた。改めて感謝すると同時に、少しでもそのお返し出来る時が来たら……と考えている。

## 地震発生あの時

与五郎

星野伸一

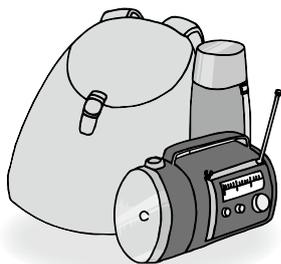
忘れもしない平成十六年十月二十三日、午後五時五十六分にあの地震は発生しました。家族は、私と母の二人暮らしです。

あの時は、夕食を終えていたが、母はこれからという時でした。一瞬何が起きたのか分からず、立つ事も逃げる事も出来ませんでした。ようやく揺れがおさまり、外に逃げ出したが、母は箸を持ったまま逃げ出してしまいました。

その後、避難所生活が始まりますが、全国のボランティアの皆様には本当にお世話になりました。あつてはいけない事ですが、どこかで震災、災害が発生した時は、私も出来る限りの協力はしたいと思う。

そしてその翌年私は、小さいながらも我が家を新築する事が出来ました。

今では二度とあのような震災は起きてほしくないし、来ない事を願っています。



## 五時五十六分 そして……

政兵衛 星野 国樹

ドカンガタガタ……何が起きたのか、周りを見れば戸は外側に転んでいるではないか。テレビは転がり、錦鯉の入った水槽がひっくり返り小さな鯉が床で跳ねていた。

何という事だ、我に返りかけた頃、ゴーという音と共にガタガタ、グラグラ激しい揺れにやっと地震だという事が分かった。すぐに両親と一緒に出た。

薄暗い地面にはガラスや屋根瓦が足の踏み場もない程に散らかって居る。車庫の前に座り込んだ。あちらこちらから住民の声が聞こえた。すぐに三人でよろみ会館の前に行く。何人かの住民が集っていたが、やがて村中の人々がぞくぞく集って来た。人員の確認そして火の元、水道の元栓、電気のブレーカー等を手分けして確認をする。驚きの余り自分が何をしなければならぬのか判断出来かねていた。家族の安否の確認、二晩の路上生活、何で何での思いだった。そして、一人のお年寄りが亡くなった事が、非常に残念でならない。



体育館で始まった

避難生活、自衛隊、そしてボランティア等多くの方々にお世話になった。

そして皆が頑張った、苦しい事つらい事等々全てを乗り越えてきた。

しかし心の隅に何か隙間が残っている様な気がする。

心から笑える日が一日も早く来る事を信じたい。

## 集落の皆で復興を

長左エ門 星野 総一郎

仕事の帰りが午後五時頃となり、自宅でビールを一杯飲んだその時、すさまじい揺れが襲う。地震だと思った時、テレビが青白くなり消え、自分の方に転倒した。そして、全ての電気は消えた。

母は隣にいたが、父は風呂に入っていたため、少し遅れて外に飛び出した。そして、母は隣の「小山」のお母さんと呼びに行き、一緒に集会所へ向かった。

集会所に行くと、多くの人たちが集まっており、夕食前だった人もいたため、とりあえず、音蔵商店から提供してもらったお菓子などを食べ一晩を過ごした。



その後、二日間集会所前の三叉路で非難し、三日目からは、旧木沢小学校体育館で避難生活を過ごし、町からの避難勧告解除後は、それまでの間で片付けをしていた自宅に戻った。

その後もしばらくは、水道などが復旧しておらず旧小学校の避難所で食事だけは食べるという形で、自宅と避難所を往復していた。

避難所で大変だったことは、共同生活になれず、よく眠ることが出来なかったこと、また、母は洗濯機が少なく衣類の洗濯が大変だったと言っていた。風呂も入ることが出来ず、一週間後仲間七人で長岡市まで行って入ったのが地震後始めてであった。

自宅の被害も大きく、基礎は五〇センチほど横に動いた。別な所にあった車庫も全壊した。そんな状況から、自宅を応急修理して、一冬を過ごしたが、十七年秋から新たな住宅の再建に着手、十八年四月今の新居に移ることが出来た。

今まで耕作していた西向きの水田は、大きな被害を受け全部止め、比較的被害の少ない自宅近くの水田約六畝<sup>セ</sup>を復旧し自分で食べるだけは何とかやっている。

ボランティアで木沢に入っていたいただいた多くの皆さんには本当に感謝している。自分自身は頼むことは無かったが、高齢の世帯を中心に多くの支援をいただいたことは集落にとって本当にありがたかった。

地震後世帯数もかなり減少して、木沢集落も寂しくなったかもしれない。でも、今までさまざまな方面から支援いただいたことに感謝しながら、また、「頑張ってほしい」というその思いに答えるべく、ふるさと木沢を少しでも元気に出来ればと、今行なわれている復興に向かつての活動を集落の人たち力を合わせ頑張っていきたい。



## その時俺は

忠吉

星野 忠明

十月二十三日午後五時五十六分、その時俺は一人で木沢の家で焼酎を飲みながら、こたつでテレビを見ていました。あとの家族、つまり妻と子供二人、韓国のばあちゃんの四人は中山の家にいました。

ドスンときたら、すぐ電気が消え、ガタン、ガチャン、ドスンとものごい音がし、ウワーと言ってコタツにしがみついています。家のきしむ音、ガラスの割れる音、カベが落ちる音がいっしょにきました。

最初にすぐカベぎわにあった幅一メートルぐらいの魚のいる水槽が俺のわきに倒れてきて腰から下がずぶぬれになった。部屋一面が水びたしになったが、それより早く外に出ようと思い、揺れがおさまってから立ち上がった。割れたガラスを踏みながら、開かない戸を無理矢理開け、ゲタ箱をよけながらやつと外に出た。

最初に砲平の恵美子さんが、「久治のばあちゃんがたいへんだ、誰か助けて」と叫んでいた。行ってみたら家が完全に倒壊していたが、立ってられない様な余震がきて、一人じゃどうにもならず、人の集まっている所に行こうと思えばセンターに向かった。センターには人がぞろぞろ集って来ていて、久治の家が倒壊した事を伝えた。その内久治の和久も来て、皆で助けに行く事になり、清一郎が重機を動かして、俺が発電機と投光器を持ち出し、十数人で出掛け、重機と人達がガレキを手渡しで出し、しばらくして台所でうつぶせでうもれていたばあちゃんを発見した。それから消防団で各家を回り、ガスの元栓とブレーカーを全部切った。そしてセンターの前で火を囲みながら、皆で長い夜を過ごした。

## 農業 再開へ思いを寄せて

益次郎

星野 晋

全壊した作業場の床に、破れた米袋から漏れた米粒が無残に散乱していた。手間暇かけて育てた「魚沼コシヒカリ」。厳選な調整を終え、出荷予定の一千八百キログラムだ。しゃがんで手のひらにすくい上げた。割れた窓ガラスの破片や木くずが混じっていた。これじゃどうにもならん、見るに忍びない「ゴミ」同然の様相となっていた。段々に成った田は、一メートル位崩れ落ちた。五〇センチ位の亀裂が至る所に出た。湧き水を溜める水田用の池も壊れた。「来年のしつけ（稲作）が出来ない」と思った。

山肌に残る四月、種籾から苗を育てる作業が始まる。育苗ハウスの設置からである。「苗作りが一番難しいよ」ひげの様な葉が出て来るとビニールハウスに移す。日が照り暑くなればハウスの両脇のビニールを捲り、風通しを良くする。気温が下がれば、石油ストーブをたき、温度調節をする。「米という字は、八十八と書くネ。……それだけ手のかかる作物さ。」

今から約八年前、水田を開放し、都会の観光客が稲刈りを体験した。そうした縁で、米の直売を始めた。甘みと粘りが自慢だ。体験が功を奏すると感じた。縁あるお客様、そして笑顔との出会い、美味しい！と言われるのが一番うれしいネ！

十一月下旬に成ると雪が降り、一冬で四メートル位積る。水田のひび割れに水が染み込み、積雪の重さでさらに土地が沈むのではと心配になる。約二ヘクタールある水田の半分は修復が必要。米乾燥機等十数台（一千万円）相当が全壊である。作業場を新設すれば一千万位かかる。借金してゼロから始めるのか？ 避難勧告が解除され自宅に戻った。ガラスのない窓から風が吹き抜ける。庭に四畳のプレハブを設置して、一冬過ごすことにした。

来春農業をやるのか、どうか？ 身の振り方はこの冬考える。ただ再

開きたい思いもある。木沢で育てるからこの米が出来る。  
ここで米を作るのが生きがいだから。

## これからも木沢で頑張りたい

子之兵衛

星野 達也

地震のあった時、私と母は夕食の準備も出来、コタツに入り食べようとした瞬間でした。「ゴォー、ドーン」突き上げる様な縦ゆれ、そして横ゆれ、近くにあったテレビが私たちの方に飛んできました。

慌ててストーブを消して、素足で一旦外に出たものの、素足は危ないと思いい履物をとりに玄関に戻りその後集会所へ向かいました。

しかし、いつも飲んでる薬が無かったので、自宅に取りに行こうとしましたが、余震で危険があったため、集落の人から付いてきてもらい中に入りました。

再び中に入ると、家は傾き、中はめちゃくちゃに、二階への階段も壁が落ちて塞がれ昇ることは出来無い、そのような悲惨な状況でした。それでも、何とか薬を見つけたことが出来一安心しました。

旧木沢小学校での避難生活で大変だったことは、共同生活で互いに気を使うことでした。

特に私は、薬によるいびきが出るため、母が気を使って時々起こすのですが、目を覚ました後は眠ることが出来ない、そんな繰り返しでした。また、家族同様に過ごしていた、犬の「ラン」は避難所に連れて行けず、自宅近くにある車庫で私たちと離れての避難生活、それも辛いことでした。

避難所生活を送りながら、自宅の片付けをしていました。そのうちに、ボランティアの皆さんが集落に入っていたいただき、我が家もお願いしました。内壁の片付け、割れた食器の片付け、障子張まで、本当に感謝の気持ちで一杯です。

避難勧告の解除後、自宅に戻りました。壁や天井までかなりの数の筋交いを入れての応急修理をし、一冬を過ごしました。その後、被災者用の公営住宅に入らないかとの話もありましたが、避難生活で苦労したこともあり、自宅が一番と、翌年（十七年）にある程度の修理をし、今に至っています。

震災から三年が過ぎ、集落のやくに立つような協力がなかなか出来ませんが、母は『健康とボケ防止を兼ね畑で野菜づくりをし、「あぐりの里」に出すこと、無理をせず精一杯やりたい』と話しています。さまざまな面で集落の皆さんにお世話になることがあります、そんな母とずっと木沢で暮らしたいと思います。

## わが家の中越大震災

音蔵

小林 美知江

来客と雑談中突然のズドン。何？ 何？？ 真暗になった。店の大型冷蔵庫が倒れ、熱いやかんが上がっていた薪ストーブがひっくり返り、倉庫に積んである越冬用の薪が崩れた。外で叫び声が出た。「下の家がつぶれてばあちゃんが叫んでいるてエ」。我に返った。

地震と気付くまで長い時間だったけど、ほんの数秒だった。冷蔵庫が倒れ、薪が崩れ、店の陳列棚がひっくり返り品物はメチャクチャ。幸い窓が開いた。そこから脱出。外に近所の母ちゃんたちがいた。余震の度に肩を寄せ合った。木の下は危ない、とにかく集落センターに集合、地区住民の点呼をとった。一人だけいなかった。余震は続いていた。道路は寸断され、車が通る心配のないセンター前の三叉路に、集めた薪で暖をとって、村中の人と肩を寄せ合った。恐る恐る家に戻り、すぐ口に入る物を店から拾って村中で食べて一晩明かした。長くて怖い夜だった。下敷きになったばあちゃんは亡くなったけど、悲しんでいる暇はなかった。翌朝、米、薪、野菜、水を持ち寄り飯とした。その日も店の中で散乱

としている食料を集めて村中の腹に収めた。二晩野宿し、三晩目は雨が心配で学校へと移動。道路を仮復旧する者、薪を集める者、食事を作る者と分担が決まった。途中で余震が来ると、その度に「ギャー！」

四日目、新潟から実家の甥が弁当、おにぎり、パンなど三百食届けてくれた。十何時間かかったとか。その中に年老いた母からの包みがあった。肌着、長靴、靴下など、その時初めて涙が出た。温かい涙だった。村中の食事らしい食事がやっとできた。皆の顔も心なしか和んで見えた。その後は町との連絡道路も復旧し、どんどん物資も入ってきた。その頃避難所生活は百三十五人。行政をはじめ、いろいろな方たちに本当にお世話になった。助けていただいたこの恩は生涯忘れる事ができない。小さな胸に大きく刻んでおいた。

今回の地震で教訓を得た事も数多くあった。復旧、復興でどこも多忙だけど二度と災いが来ない事を願いつつ……。

## 地震から三年

圓柳寺

古田島 祐豊

住職はじめ家族は、新潟・長岡へと出かけ、地震発生時、寺は留守だった。いそいで木沢に着いたのは、地震発生から一夜明けた午前八時ごろだった。地域のみんなが集会所前の路上にいて、一様に疲労と不安で一杯であった。小千谷の木津から木沢まで歩いていく先々で、アスファルトがめくれあがり、抜け落ちている道路や欠けた山々、倒壊している家々を多く目にした。「木沢の村はどうだろうか。」「お寺はどうだろうか。」不意に恐ろしくなり、不安ばかりが募った。ラジオでは被災地の悲惨な情報が繰り返されていた。

木沢に着き、一人では危険だからと、付き添いの下圓柳寺へ行くと、お堂の中は惨状であった。傾いたお堂。壁が崩れ落ち、ほとんどの仏像がその下敷きとなっていた。言葉を失い、唯々呆然となった。

三年以上が経った今思い起こしても、涙が出てくる。路上、体育館での非難生活。一步一步ゆっくりと歩いてきた復旧への道のり。

木沢のみんなのたくましく生きる力があつた。強い、強い絆があつた。そして、全国各地から集まり、身を粉にしてご尽力くださったボランティアの方々。お互いが助け合つて生きることの大切さをこれほど感じたことはない。

そして、また、圓柳寺の檀家のほとんどが甚大な被害を受けた中、すべてのお檀家さんがお寺を守るために立ち上がつてくださった。多くの力、強い絆、生きることへのたくましさがあつて今、圓柳寺はしっかりと木沢の地に構えている。

「地震の記憶を忘れてはならない。」

お寺の茶の間でも、地震の話が今でも続く。

地震から三年。

『木沢の自然が戻ってきた。』



平成十六年十月二十三日十七時五十六分

「その時私」は

清八 小林 清一郎

私は風呂に入って夕食前、二階でゆったりしていました。突然ドカーンと縦揺れ横揺れに何が何だか分からない内に、電気が消え恐怖に陥りました。何が起きたのかわかりません。とにかく外へ出る事しか頭の中にはありませんでした。エアコンの室外機につかまって、下に降りました。一階のガラスが割れていて、素足で踏んでしまったが、痛むのも堪えて家族の無事を確かめるのが先決と咄嗟に感じました。

母がトイレに居ると言うので、家の中に入ろうと、ぎっしり積んであつた冬用の薪が崩れて足の踏み場も無い位の玄関から、薪をどけながら中に入り、母を背中におんぶして、前の畑（安全と感じた場所）迄出ました。ここで初めて家族の無事を確認できました。

そしてパツと頭に浮かんしたのは火の元である。妻にガスは大丈夫かと聞くと、大丈夫とのことであつた。母が豆炭炬燵があるぞと思ひ出してくれた。これは大変だと、その炬燵を出す段取り。落とし板を外して何とか炬燵を出す事が出来一安心でした。まだまだ揺れはおさまりません。あれこれしている内に、皆がセンターに集まるようにという話があつた。行つてみると、皆さんが集まっていました。あれから三年経とうとしている今日この頃。あの恐怖が今でも昨日のように蘇ってきます。

わが家の中越大地震

万平家持

星野光治

山から帰って来て晩酌をしていた。ゴォーという地鳴りと共に下から突き上げてくるような感じで家具が全部倒れた。

妻は夕食の支度をしていた。食器の戸棚が開き食器が全部落ちた。裸足で道路に飛び降りた。余震が多く、履物はその後再び家に取りに戻った。

家の壁は崩れてしまった。ガスを止めに行ったら、消火器が落下して頭に落ちた。戸棚から物が落ちた。

二泊は、よるみ会館の前で野宿。焚き火をしながら野宿をした。食事を作った。雨はふらなかつたが寒かった。食べることに苦勞しなかつた。交通がだめで町との連絡が出来なかつた。

貴重な体験をした。みんなが米や野菜や鍋を持ち寄り炊き出しをした。その後は小学校での避難生活が続いた。七つ部落が分かれていて村の役員をやっていた。議員さんの指示で電気やプロパンの安全点検を一軒一軒回った。

避難所に茨城のボランティアの人達が来て、自宅の屋根のトタンなどを片付けてくれた。本当に助かったと思った。ありがたかった。木沢の若い人も手伝ってくれた。

助けてもらったので、中越沖地震の際には柏崎の様子を見に行き手伝いをした。

私達は一度地震で被害を受けた。集落内の絆は地震がある前からあったが更に強まった。年寄りばかりなので迷惑にならないように体に気をつけて生活していければいい。集落のために頑張っていきたい。

## 芽吹き

弥吉

渡辺サチ

中越地震は、誰にとつても突然襲った不幸な出来事であったことは言うまでもありません。それは同時に、多くの人々にとつて、さまざまに意味で人生の転機となったことでしょう。

お寺（円柳寺）の大木が我家に倒れてきたのだと思うほど、最初の揺

れは突然で大きなものでした。近所の人たちと外に退避していると、「よるみ会館」に集まるようにとの連絡を受けました。結局、会館前の路上で二晩を過ごし、音蔵商店さんから商品の食品を提供していただいたり、村中の人々が自宅にある食料や薪、鍋釜を持ち寄り、食べ物には不自由しませんでした。それでも、余震の怖さと不安から、夜はほとんど眠れませんでした。

三日目から旧木沢小学校体育館での避難生活が始まりました。私たち夫婦は、そこに四十日間ほどお世話になりました。家の被害のことや将来のことを考えると不安でしたが、避難所では、食事のお世話もしていただき、長年の友達とも一緒に居ることができたのは、ありがたかつたと思つています。避難しているとき、富永房枝さんがいらつしゃつて、その講演を聞き、障害をもつていてもこんながんばつていらつしゃるのだと、勇気付けられました。足でサインしていただいた御著書も大切にしています。またヘアークットのボランティアさんに髪を切つていただいた時は、その手際のおよさや丁寧さに、小さな感動すら覚えました。

震災から二年後の平成十八年十一月に夫は他界しました。木沢の皆さんにお気遣いいただき、ご心配をおかけしておりますが、震災の経験が私を強くしてくれたと思ひます。「強くしてくれた」というよりは、震災により、物も人もお金も決して永遠のものではなく、いつかは無くなり去っていくものだということを、つくづく学んだのだと思ひます。避難所生活では、半畳ほどの広さに自分の荷物をどう整理しておくか苦勞しましたので、それを思うと、独りになつても、自宅での日々の整理整頓など楽なものです。私は若いときに、多少繊細すぎるところがありました。震災の経験から、いざという時には周囲の人びとが、ボランティアの方が手を差し伸べてくれる。それを頼つてもいいのだと考えるようになり、生き方が少し楽になりました。

多くの方々が、震災を契機に木沢を離れ、他所に転出していきました。そうした別れは寂しいものですが、再会したり、便りや人づてに、元気で暮らしていることを知つたりすると、とてもうれしく思ひます。わた

しもこの木沢で、僅かばかりの畑を耕して野菜を育て、春には山菜を採り、命の芽吹きに接しながら、肩肘張らずに生活していきたいと思っております。

## 忘れられないボランティアの人たちにありがとう

弥五右衛門

星野 幸子

十月二十三日、五時五十六分に大きな地震がきました。それは震度七で、中越大地震と名付けられました。

その時は、ご飯を食べようとしていたときでした。急に電灯、テレビなどが全部消えて、揺れ始めました。私は、揺れが収まるのを待って、急いで外に出ました。そして、周りを見ると私の家のいけすが全部無くなっていました。その時はとてもびっくりしました。

そして、隣の家の人たちと集まったので、少し安心していたら、遠くから、

「センターのところに行ってください。」

という声があったので、みんなで少しずつ進んで行きました。そして木沢の人達全員が集まっていました。でも一人だけいませんでした。その家は、一人暮らしのおばあさんの家で、屋根しか残っておらず全壊でした。

その後、センターの前の外でたき火をしてみんな集まっていました。そうしていると、お店で売っているお菓子などを全部持ってきてくれました。何も食べていなかった私たちはすごくうれしかったです。しかしそれは、少ししか無く、木沢の人たち全員に分けられませんでした。

寝るのもとても辛く、起きるのもとても辛かったです。そして朝になり、起きてみるとお母さんたちが色々なものを作ってみんなに食べさせていました。そのような日々が三日間続きました。木沢の区長が、

「閉校になった木沢小学校に行こう。」

と言ったので、全員で木沢小に行きました。そして自分たちの寝る場所

を見つけ、ご飯になるまでみんなと遊んでいました。そしてご飯の時間になるといろいろと手伝ったりしました。そして一日が終わりました。

起きるとボランティアの人たちがいて、いろいろなことを手伝っていました。私たちは、朝ごはんを食べ終わって遊んでいると、ボランティアの人たちが私たちに話しかけてきているいろいろなお話をして仲良くなっていきました。

ご飯の時以外は、ボランティアの人たちはグラウンドなどに出てみんなと遊んでくれました。ボランティアの人たちは、次々と変わっていきましたが、私たちと仲良く遊んでくれました。その時がともうれしかったですし、楽しかったです。

私はボランティアの人たちと一緒に手伝いをしました。それは、お菓子作りです。そのことが今でも忘れられません。チョコレートなどを切ったり、そのチョコレートを溶かしたり、バナナやりんごにチョコレートをかけたりする手伝いをしました。そして木沢の人たちに配りました。

また、ボランティアの人たちに勉強を教えてもらったりしていました。私は、特に忘れられないボランティアの人が四人います。その人たちは、今でも木沢に来てくれます。また、手紙を書いたりしています。その人たちとは始めはあまり仲良くありませんでした。でもお話をしているうちに仲良くなっていきました。色々と遊んだり、住んでいる所のことなどを教えてもらいました。私はこれからのボランティアに来てくれた人たちを忘れずに、仲良くしていったり手紙も書いたりしたいです。

(この原稿は平成十七年十月に発行された「川口町児童生徒震災体験記」に掲載され、当時幸子さんが川口中学校二年生の時のものです。)

## わが家の中越大地震

長蔵

星野 光子

嫁の出産予定日が十月二十八日であったため、もしそのまま予定日ど

おりの出産でしたら、ヘリコプターで病院まで運んでもらうしかなかったでしょう。今だからこそ、「幸いにも」と言えるのですが、震災の前日十月二十二日無事出産し、小千谷市の魚沼病院に入院していました。

震災の当日は息子も仕事から帰ってきており、当時二歳上の孫娘が「ママ、ママ」としきりと呼ぶので、皆で病院まで嫁を見舞いに行こうとしていました。自動車を家の脇に止め、私が孫娘を負ぶったところで、地震が来たのです。

最初の揺れでは、動くことすらできませんでした。家の前のいけすの建物は水田に落ち、私たち家族は仏間の西側から外に出ました。しかし、あぜ道も落ちていて、どの方角に逃げたらいいのか困惑する状況でした。

魚沼病院の母子の無事は早くに確認できたのですが、木沢は孤立状態で自動車が使えませんでした。その病院も、地震によるけが人などが次々に運び込まれてきて、嫁親子も四日目に退院するにも、私たち家族は避難所生活ですし、嫁の小千谷の実家も被害を受けており、結局、埼玉にいる嫁の妹さんを頼って、新潟から福島経由で九時間をかけて、息子が自動車で連れて行きました。約一月そちらに身を寄せ、その後で小千谷の実家に世話になりました。

息子は一ヶ月間、小出の会社まで通うことができなかったので、大工さんに寒さをしのがれるように修理してもらったり、家財道具を車で車庫へ移動させていました。ボランティアの方に頼むことはせず、自分たちでなんとかやりました。我が家は六人家族と多いので、仮設住宅に移ることは考えませんでした。

母子が体調も崩さずに元気であったことが何よりでした。ただその孫たちが成長するに従い、村の中に小さな子供が少ないこと、そして今や、木沢には小中学生はおらず、就学前の子供はうちの孫たちだけになってしまったのが、さびしくもあり、孫たちが可哀想です。

孫たちの通園・通学など将来のことを考えると、水田や畑での農作業こそ生きている夫の気持ちも汲みつつも、木沢を離れることも選択肢の一つとして考えざるを得ません。その岐路に立ちながら、震災も含めた

過去の出来事を思い起こし、これからのことを考えようとしているところ  
ろです。

避難中長い間お世話になりました事、忘れてはならないと思います。



## 地震から二週間後、古里を離れる

富蔵 星野 広吉

中越地震発生日、長男が鯉取りの手伝いに来ていた。長男が夕食を食べて帰るので、私とバサと玄関先まで出て長男が車で走り出すのを見送った。其の時、突然ガタガタドスンと物凄い音と共に私達は足払いをくらった様に転んだ。玄関の戸は外れて飛んでくる、石油タンクが転げ落ちてきたり、屋根の瓦も落っこつてきた。電気は消えて真暗、一瞬何が起こったか分からなかった。やがて、長男が下から上がって来た。長男の帰りがもう一、二秒遅かったら道路と車ごと一緒に下の溜池に落ちて居た。まさに危機一髪で難を逃れた。部落の人は皆部落の上の県道に集った。全員無事の顔を見た時はほっとした。

私達は二晩亀三さんの車の中でお世話になった。毛布もたくさん用意して貰ってほんとうに助かりました。食事も村の若い人達が一生懸命作ってくれて三度三度温かいご飯を食べる事が出来て、有難い事だと思えました。

十月二十五日、木沢の若い人達が、これから旧木沢小体育館に避難する様にと迎えに来てくれました。体育館では木沢・峠の若い人達は一致団結してほんとうに一生懸命活躍されました。私達は色々大勢の人のお世話になりました。地震から二週間後の十一月七日、大勢の人に見送られて静岡へ向かいました。ほんとうに有難うございました。

## わが家の中越大地震

亀三 星野 美子

二〇〇四年十月二十三日、夕食を終え、茶の間でお茶を飲もうとしていたときに、「ドーン」とまるでミサイルでも落ちたかと思うほどの轟音、そして激しい揺れ。私たち一家は、身動きひとつできずにいまし

た。次の余震が発生したとき、おじいさんの「地震だ！」の一言で、裸足で玄関から外に飛び出しました。峠地区の人たち皆で、県道まで上がって行き、バス停のところに集まりました。依然として激しい揺れは続き、とにかく子供を守らなければと思う気持ちと、しかし自分には何もできないという絶望感と恐怖感から私は幼い娘を抱きながら、その場で泣き出してしまいました。そのとき、傍らにいた小学校四年生の息子が、「大丈夫、僕がいるから」と言ってくれたのです。

いつも「私がついていてあげなければ、私が守ってあげなければ」と思っていたのに、息子の、親を気遣い励ましてくれたこの優しい一言には、本当にうれしく、頼もしく思いました。このときのことを、一生忘れることはありません。

二十五日に木沢の区長さんと役場の職員の方が来て、旧木沢小学校に避難するように言われました。避難所生活の間は、何度か衣類などを取りに自宅に戻りましたが、木沢と峠を結ぶトンネルが崩落の危険があったため通行できず、迂回しなければならなかったのが大変でした。我が家の男衆は、牛の世話があったため、避難所には二晩だけで自宅に戻っていききました。私と子供二人は、十一月中旬まで避難所に留まりました。子供たちは、ボランティアの方や観音の郁子ちゃんたちに遊んでもらっていましたが、子供ながらに地震の恐怖は十分に体験しており、峠には戻りたくないと言っていました。

中越地震から現在まで、私にとっても、家族にとってもさまざま変化がありました。私がついても気がかけているのは、やはり子供たちのことです。地震前は、夜、それぞれ一人で寝ることができたのですが、以後は怖がっており、夜間に一人でトイレに行くこともできません。時の経過と共に、次第にもとに戻ってくれるものと信じています。中学生となった長男は、稲刈りなどの農作業をよく手伝ってくれています。二人とも、おじいさんについて、田や畑に出かけていくことが楽しいようです。

木沢と峠を合わせても、小学生と中学生は我が家の子供たち二人だけ

になってしまいました。近所に友達がいなのは可哀想に思いますが、豊かな自然の中で伸び伸びと、感性の豊かな、人への思いやりを大切に育てて欲しい。あの時の息子の言葉を思い出しながら、今はそう願うばかりです。

## わが家の中越大地震

権平

星野京子

中越地震からまもなく三年が経とうとしています。私自身、今やっと、当時のことを振り返ることができるようになりました。

二〇〇七年七月に中越沖地震が発生し、その月の内に刈羽村に住む妹家族を見舞いに行きました。倒壊した住宅を目の当たりにし、「ああ、三年前はこうだったんだなあ」と遣る瀬無い気持ちになったと同時に、ところどころうつろな記憶を頼りに、これまでの三年間の経験を振り返るきっかけになったのではないかと思います。

中越地震発生の日夜は、バス停近くの路上に峠地区の住民全員で集まり、連発する余震とそのたびに延びていく道路の亀裂に怯えていました。しかしそんな恐怖心を抱きながらも、夫と二人、軽トラの座席に座って見上げた星の美しさが強く印象に残っています。

私たちの家は全壊し、峠地区には避難指示が出たため、旧木沢小学校の避難所にしばらくお世話になりました。避難所では木沢の方たちにも親切にしてください、本当に感謝しています。ただ、夫はそれまで、明るくなると家を出て、一日中農作業や牛の世話などで暗くなるまで帰宅せず、夕飯を済ますとすぐに寝るといふ生活が続けてきたため、避難所での時計に合わせた集団生活に馴染むことが難しかったようです。

我家では、八年間世話をしてきた闘牛の「権平号」が、倒壊した牛舎の梁が背中を直撃し、翌日の夕方に息を引き取りました。私は越路に暮らす倅せがれ家族のもとに身を寄せ、夫は峠に一人残りました。「越路に行け」

と言われたときも、「何で越路に行かなければならないのか。息子たちに何かあったのか」と思いました。わが身に降りかかった災難という現実を受け入れられていなかったのだと思います。避難所にボランティアで来ていた、おそらく心のケアをされる方に、何を話したかはまったく憶えていないのですが、私はとにかく頭に浮かぶいろいろなことを話したようです。

十一月、牛舎の横に重機で穴を掘り、「権平号」をいっぱい菊の花と共に葬ってやりました。東京の五十嵐さんから預かっていたもう一頭の「鷹嵐号」は、新発田の別の業者に預けました。我が家は、続く余震と雪の重みに耐えかねて年末に倒壊してしまいました。しかし、息子たちも休日に来て、片づけを手伝ってくれたおかげで、家財道具もそろえた作業小屋に移り生活しています。

私が越路から戻ったとき、峠地区は一面真っ白な雪に覆われていました。まるで魔法でもかけられたようでした。春になり、雪が解けていくと倒壊した自宅や、がけ崩れの跡、道路や田畑の傷跡も再び現れてきました。それでも、木々は芽吹き、新たな命が誕生してきます。コンビニの便利さを新たに覚えた夫は、相変わらずのマイペースです。夏休みに遊びにくる三人の孫たちの笑顔を楽しみに、これからも大好きな峠に健康で暮らしていければ幸せだと思っています。

## 災害で変わる生活

徳助 星野 伊佐巳

上越での仕事の帰り、高速道路の標識に地震と二回ほど出てきた。気にもせず柏崎で下り、料金所で車を止めた途端に大きな余震が来た。家の塀は倒れ、道路の路肩も落ち、半分の巾しか使えない。川口に近づくにつれ、被害が大きくなっていく。武道窪まで来ると道路脇の家が殆ど壊れている。家族や家のことが心配になった。

道は陥没し、これ以上進めず、途方に暮れていると八十八さんがやって来た。これで心強くなり、二人で向かうことにした。迂回し川口温泉の近くまで来たが、道路は無数のヒビが入り渡れない。そこで二人で力を合わせ、ヒビの中へコンクリート舗装のかけらを投げ入れ、渡ることができた。だが牛ヶ首地内まで来ると、道路が沢に落ちまったく無い。日も暮れて暗い。八十八さんの懐中電燈で照らしてもらい、歩くことにした。先の状態がわからず不安でゆっくり歩いた。堀ノ内の明りも消え、車の音もなく異様であった。

木沢の入口までできたが電燈もつかず暗やみである。上の方で話し声が聞こえ、行ってみると大勢の人達が集まり、たき火を囲んでいた。無事帰ってこられてよかったね、と皆が喜んでくれた。家族も元気で安心した。間に合わせの食べ物と毛布しか無く寒い。空には星が沢山輝いて不気味である。地鳴りがして余震が次々と来る。精神的に疲れ怯えている。地震が治まらないうちに家に帰ることもできないし、修復することもできない。大変なことになった。

なんとか夜が明け、助け合いの生活が始まった。必要なものは持ち寄りにし、それぞれ出来ることは進んでやった。とりあえず出来ることを一つずつやっていくしかなかった。今までのふだんの生活があつという間にこわれてしまった。前の生活に戻すことはむずかしいし、出来ないかもしれないという不安でいっぱいであった。

## 魚沼病院にて

栄蔵 星野 キミ

ゴーという音ははつきりおぼえて居るが、何が起きたかはよくわからなかった。

病院では今夕食の膳が皆に配られて、ベッドの上の棚に上げてこれから食べようとしたところだった。私の居た部屋は六人部屋だったが、四人しか居なかった。八十才のKさん、私より少し歳の多いHさん、私と同じ位のMさんの四人で、三人は棚にお膳を上げていたので、全部ひっくり返って布団の上に落ちた。私はもう少しで退院する位だったので、ベッドに腰掛けて横向きになってお膳を敷布団の上に置いたので、汁物はこぼれたが、ひっくり返りはしなかった。でも食べる事は出来なかった。

続いて起る余震に、皆震え上がっていた。電気が消えた。看護婦さんが、「ベッドが上がってなさい、ベッドから降りないで下さい。」と大声で言っただけで廻っていたその間も、ゴーと鳴ったと思うとグラグラグラとゆれ、皆の戸棚の上にテレビが上っている台が、キャスター付きなのでガラガラガラと動いて廻る。そのうちベッドもだんだん色々な動いてチグハグになって来た。

発電機が付いたらしく、全部の部屋に豆電球が一つずつ点いた。また看護婦さんが、大きな声で「トイレには行かないでください、この中に用足して下さい。」と大きな段ボールを持っておむつを一枚ずつ投げ捨てる様に配って行った。私は入院する時に、紙おむつ二枚を持って来なさいと言われたので、平らな長いおむつを持っていたので、「有ります。」とこたわった。

余震は中々終わらず、グラグラとする度にキャーと声を出す人も居た。豆電気になったので、よく見えた外はとても良い月夜だった。そのうちに運ばれて来る人が人が部屋のベッドいっぱいになった。

その頃にHさんが小便が出たくておなかが痛いのだが、寝ているとおむつの中に出て来ないので仕方なく立ってベッドにつかまってしたら、

全部足を伝って病衣のズボンの中に出てしまったと困っていた。そのうちMさんが私も寝てどうしても出ないで困ったと言ったので、私が思い切って「ごみ箱の中に袋を置いてしてみたら」と言った。Mさんはこの際だからそうすると言っていたらしい。そしておなかの痛いのが治って良かったと言った。私は長い平らな紙おむつを床に敷いてしゃがんで小便をした。三回したが、外にはもれなかった。

これは十月二十三日の夕方からの事である。私は九月の四日に右足脱臼骨折で、救急車で魚沼病院に入院して手術をして、金属で釘六本でとめたとの先生の話だった。それからもう少しで二ヶ月になろうとしていて居いたので、そろそろ退院する事を考えていたのだが。二十四日の朝から木沢の情報が知りたくて色々してみたが電話も通じず、人も来ずどうする事も出来なかつた。そのうちに病院で三棟の真中頃に小さなテレビを一台付けてくれたので、動ける人は皆見にいった。木沢の政兵衛の父ちゃんが、行政を待っていたっておそくてだめだから、村中の人達が力を合わせて自分達の手で一本の道を通して、やっと孤立から脱出したとテレビに出たので、その時木沢が孤立してしまった事を知った。その後には私の家の人が来て、帰るところがないから、もう少し病院に居させてもらうことにした。

私達は病院でこわいと思った位で逃げる事も何もしなかつたから幸いな方だった。家に居た人達は、命からがら逃げ出して、寒い思いをしたとの事。窓ガラスも家具もメチャクチャになったものを片付けるのも大変だったろう。

私は何も手伝いもせず過してしまい、本当にすまないと思った。

そして看護婦さん達だって家の事も子供の事もあるのだらうに、病院で私達の事を一生懸命やって下さる事は大変な事。偉い事だと思つづく思つた。

.....

※星野伊佐巳さんと星野キミさんは地震後、地区から転居されましたが、今回、記録集の作成にあたり、寄稿いただきました。



# 忘れられない人たち

---

～お世話になった人たちからのお便り～

## 木沢の思い

東京都練馬区 施い 勝彦

十月二十五日、私は仕事で銀山湖の辺で中越地震を体験しました。突然の轟音、突き上げる地面、突然の事なので、何が起こったのか判らない自分の目の前の崖が崩れるのを見て地震だと気がつきました。二回目の地震は、辺りが薄らと見える程度の暗闇の中、轟音と共に座り込んだ大地の下で岩石と岩石が擦れあうのを感じました。兎に角、なにも無いフィールドの中、地震がおさまるのを朝まで待ちました。翌朝、小出から帰ることができないので、松枝岐から東京に戻り、テレビで初めて地震の規模を知りました。いつも、お世話になつて居る地域なので、何か手伝いはできないかと思ひ、仕事の都合をつけて十一月五日にもう一名のボランティア西尾由美を連れて、川口町に向かいました。町に近づくほど崩壊した崖、波打つ道、被害の大きさを目の当たりにしました。川口町では援助物資、ボランティア組織の運営は、私が着いた時には上手く運営されて、私の仲間の二名は町の近くで二日間ほどお手伝いしました。三日目に木沢地区のボランティアの人数が少なく聞き、木沢に行くことにしました。町の国道から木沢に向かう道に入つてすぐ、農機具が入っている家が道に傾き倒れそうなるを地元の人に重機で押さえて車を通してもらいました。山に上がる道の手前で墓石がみな倒れているのを見て、これは大変だと思ひながら道を上がつていくと、道路はいたるところが崩壊して、道とは呼べない状態でした。崩壊した道の地域は急造のバイパス道が切り開かれていました。木沢の避難所について、区長にまず何かから手伝えばいいかお聞きしたら、婦人会の人達の手伝いをと聞いて、学校の入り口に上がったところで、丁度、婦人会のみなさんが救援物資を分けていたので、そこから活動に入りました。救援物資を分けてから、学校の通路にばらばらに積み上げられた救援物資がわかりづらいので、婦人会の皆さんに断つて、種類別に通路に並べ換え、現在の在庫数がわかるように直しました。私が行つた時には、自衛隊か

ら調理されたおかずとご飯が木沢に配達されてきました。婦人会のみなさんが、それに足す形でオカズを作られていました。救援物資の食糧が給食室に置かれていたので整理して確認したら、カンパンなど乾き物の緊急時以外は、その時はもう必要としない物やレトルト食品が残っていました。そのままの味では、避難所生活をしてきた皆さんには飽きられていふと思ひ、仕事で大人数の食事などを作る事をしていふので、このレトルトや果物などを使って、食事の楽しみが増えたらいいと思ひ、調理の手伝いをさせていただきました。また地域の方が、新鮮な野菜やニワトリ（生きていましたが）を持ち込んでいただけだったので、少しでも食事に変化をつけることができました。子供達には、チョコレートで包むバナナやリンゴ作りを手伝つてもらつて沢山のお菓子も作ることもできました。後から教えていただきましたが、あの崩壊した道路を復旧したのも、救援隊ではなくて地元、木沢の人達が切り開いたと聞きとても驚きました。お手伝い中に感じたのは木沢地区の人達の実行力とま



ボランティアの施いさん(左)と西尾さん(右)

りの良さでした。

木沢でのボランティア活動から一年後に、仕事で小出に行きましたので木沢がどうなっているだろうと思いい、小学校に行ってみました。学校の裏手の破壊された鳥居は新しく直され、地震の爪跡はまだ沢山ありましたが、復興の力を感じました。避難所に私が訪れた時も、婦人会の方々、区長をはじめ世話をされている方々も悲惨な災害を受けたにもかかわらず、前向きな姿勢、笑い顔、そしてまず自分達で復旧が出来る所からはじめていこうという力を感じました。豪雪地帯として協力して生きてきた力があるんだと、私は強く感じました。まだまだ二〇〇七年も地域的に地震が発生して気が抜けない状態ですが、木沢地区の繁栄をお祈りします。

## 木沢の思い出

神奈川県横浜市 西尾 友美

震災から約一週間後、私は川口町でボランティア登録をした。

「地震が来たらこんな感じかな」と想像したことはある。けれど、実際に震災の現場に来て、息をのんだ。崩れてしまった家、倒壊の危険性を知らせる赤や黄色の色紙、学校に避難する人たち……。ボランティア一日目には私自身、震度五の余震にあいとても恐ろしかった。しかし二十三日の大震災を経験した人達はこういう余震に耐えながら生活していると思うと、怖がってばかりもいらなかった。

私たちは木沢小学校で炊き出し等の活動をした。ここでは大勢の人が避難生活を送っていた。地震のストレスとプライベートが保証されないストレス……。それぞれの人が様々なものを抱えながら、先が見えない状況の中で集団生活していくには大変な苦労があったと思う。しかし木沢の人たちはそれでも明るくとても穏やかに私たちに接してくれた。私たちは子ども達と一緒に遊んだりお年寄りの方達とおしゃべりしな

がらストレス軽減に努めたり、皆さんの食事を作るお手伝いをしたりした。夜はストーブに薪をくべながらおじさんおばさん達の話を聞き、地震の恐ろしさを改めて感じた。

避難物資を使って子ども達とチョコレートフォンデュを作ったのが心に残っている。チョコを溶かしてバナナやリングにつけたものを、チョコお化けのようになりながらみんなで食べたり、避難生活をしている人たちに配ったりした。子ども達が屈託のない笑顔で喜んでいる姿を見て、周りの大人に笑顔が広まっていくのがとても嬉しかった。

また、たくさんの人から「ありがとう」助かるよ」と声をかけてもらい、とても嬉しかった。実は、私もここに来る前に挫折を味わい落ち込んでいたのだ。私は震災ボランティアとして新潟に行き、被災者の方を励ますつもりだった。けれど逆に私が元気をもらった。一人の方にこう言われた。「ボランティアっていいなあ。俺も関東大震災が起きたらボランティアでいくから」そしてこの間、その方が震災のボランティアとして参加されたという話を聞いた。心が温かくなった。あるときボランティアをやって良かったと改めて思った。三年の歳月が経ちその間いろいろ苦労があったことは想像に難くない。しかし努力の甲斐あってほぼ元通りに復興したという話を聞き、本当に安心した。

これからも、お元気で過ごしてください。震災の節はどうもありがとうございました。

## 木沢の皆様へ

福島県会津坂下町 妹尾 弘

平成十六年十一月より約八ヵ月川口町のボランティアセンターを通じて、木沢では特に避難所にて、皆様の御手伝いをさせて頂きました。

当時自分は就職を決めかね悶々とした日々を過ごし、震災については報道より阪神での其の記憶を思い起こすのみでした。暇な身が役に立て

ばとセンターに尋ねた所、人手が要るとの事で来る機縁を与えられました。

中山間部での生活、建て直しの困難、連なる雪、総て事前の思い量りを超えていました。又未熟な自分は皆様とどう向き合うべきかさえ悩みました。ただ御手伝いの中、御話を聞かせてもらい、残る傷跡を見、何が必要で何が出来るか推し量るばかりでした。

かえって木沢の人の縁の有難さ、地域の豊かさ、殊に突然の災いに、自然と団結して村の生活を営まれる御姿、其の後の皆様の歩みの御姿に様々な事を教えられました。

ただ自分が何か御役に立てていれば幸いです。御世話になった皆様に感謝すると同時に、今後の御多幸を御祈り申し上げます。

## 発展を願って

新潟市立金津小学校校長(旧木沢小学校校長) 服部 町子

『山と川が織りなす四季の美しい川口町。一夜にして余震におびえる町に激変した川口町は、私にとって単身赴任の三年間を過ごした思い出の地である。勤務校の木沢小学校は昨年度末で閉校した。私は閉校式典の挨拶で「どうぞ、この美しい風景の中に建つ温かい学校、木沢小学校を末永く心の中にとどめておいていただけますように」と、参加者に呼びかけたのだが…』

これは三年前、校長会「初等教育」に載せた原稿の書き出しです。すでに別の原稿を提出済みでしたが、急遽「がんばれ木沢の人たち」と題して差し替えて頂いたのです。

振り返れば、学校の避難所で、厳しい環境に身を寄せ合い助け合って生活していた皆さんに、今教育界で求められている「生きる力」を見る思いでした。

地震の怖さに怯えたこと、たき火を囲んで夜を明かしたこと、三日目

から学校に避難したこと、学校が閉校して空いていたので身を寄せられたこと等を聞かせてもらい、胸がつぶれる思いでしたが、地域の絆と強さと結束力を感じ、早い復興を願っていました。

再会する度に皆さんの表情が明るくなり「自然の破壊力も凄いけど、人間の回復力も凄いことだ」と思いました。そして三年を経て、恐怖と挫折から立ち上がり、穏やかな生活を取り戻せたことを共に喜びたいと思います。これからの木沢の皆さんに、幸多かれと祈っています。

## 川口町復興のエネルギー

新潟市立紫竹山小学校教諭(旧木沢小学校教諭) 滝澤 隆 幸

「あれから、どれくらい、たったのだろう。」

こんな出だして始まる歌がある。この歌詞をつぶやいて、あの中越大震災を思い出す。まだ、わずか三年である。遠い記憶ではない。決して忘れられない、強烈な記憶である。

当時、私は川口小学校に勤務していた。大震災の翌日、竜光から川口町に入った。とにかく子どもたちの安否が心配であった。だが、残念なことに尊い命を奪われてしまった子どもがいた。また、家族の思い出がまった家を壊されてしまった子どもがいた。さらに、町を離れて別の地域で生活しなければならぬ子どもたちがいた。一瞬にして平和な生活のすべてを破壊されてしまった。子どもたちは、大人以上に大きな衝撃と不安と悲しみと憤りを感じていたことと思う。

しかし、子どもたちは逞しかった。さわやかな笑顔、にぎやかな声、元気に活動する姿。このような子どもたちの姿を見て、大人はきつと勇気付けられたに違いない。子どもたちは、川口町復興のエネルギーである。

二年前に、私は川口小学校での勤務を終えた。別れの際は後ろ髪を引かれる思いであった。当時受け持ちをしていた子どもたちは、この春に

川口小学校を卒業する。誰に対しても自慢できる素晴らしい子どもたちであった。

彼らは、あの大震災でも変わることのなかった明るさと行動力で今後にも活躍し続けてくれることだろう。そして、彼らはいつでも「ふるさと川口町」を愛し続けてくれることだろう。やはり、彼らは町のエネルギーである。

私は、あの大震災の記録とそれに負けない逞しさをもった彼らとの思い出を、次代の子どもたちへ語り継いでいく。これは、彼らからエネルギーをもらった者の使命である。

## 木沢の歴史（木沢の源流をさがす）

長岡市(旧木沢小学校校長) 高野 登吉

「私は、この学校に来るのが楽しみでしてね。なにしろ、私と同姓の星野姓の人達は私の先祖と同族だったそうでね。」と木沢小学校校医、小千谷総合病院の星野医師はほほえんだ。

そこで木沢の源流をさぐるため歴史書を見、村人から木沢の過去を聞き歩いた。

木沢は今、二子山の南斜面にあり、魚沼三山と対面しているが江戸期までは西むきの武道窪斜面にあったという。武道窪から二子山への途中斜面に「中村の杉」と呼ばれる木沢・星野寿雄氏屋敷あとがある。木沢は昔、二子山西むきに点在していたのである。

なぜ、いつ頃、木沢は南むきに変ったのか、木沢の源流は何であろうか。地震が木沢を南むきに移動させたのではなからうか。

中越地震、中越沖地震と僅かの間に大地震が長岡近辺を襲ったが江戸期も地震や災害が頻発したという記録がある。

延保 六年(一六七八) 江戸大地震

宝永 元年(一七〇四) 浅間山噴火

元禄一六年(一七一九) 南関東大地震  
天明 三年(一七八三) 浅間山大噴火

川口町の地震・災害記録は今後の調査によるが、江戸期での大震災は木沢にも影響があったはずで、山崩れ、がけ崩れは激しかったことだろう。

そして、木沢の村人は二子山西むきから南むきへの移動を余儀なくさせられたのだろう。

木沢の土地に強い愛着があったことは、木沢の村人が以前に住んでいた、九州の福岡県八女郡(市) 星野村の土地柄や風景が木沢にそっくり似ていた理由もあったことだと思う。

星野村は有明海から矢部川を遡ること四〇キロメートル、高峰山、大山、鈴ノ耳納山等五、六百メートル級の山中にあり木沢そっくりの別天地である。星野村を西に有明川めざして流れる川は星野川と呼ばれる。

元弘元年(一二三二)、元弘の役がぼつ発。いわゆる南朝の後醍醐天皇と北朝の争いが始まり星野一族は南朝に味方した。

後醍醐天皇は翌(一二三三)年、隠岐に流され楠正成らの挙兵も効なく南朝側は敗北した。

さあ、星野一族は星野村に居られず居所を求めて流浪の旅に出た。その時の仲間に前述の小千谷総合病院星野徹也医師の先祖もいたわけである。

星野一族は陸路、木沢にきたか、海路海を渡って来たかは不明である。陸路で九州から木沢までは何千キロ。北朝の追手を逃れての旅はさぞ、つらかったことであつたらう。

しかも、暖かい九州からは木沢の雪は想像も出来なかったことである。正保四(一六四七)年の検地帳によると「屋敷数十二のうち肝煎二軒あり、屋敷高六畝歩免税とされる」とある。

とにかく、木沢に落ち着いた人達は真剣に村の発展を願い働いて来た。木沢は錦鯉の山地である。ある人が三色鮮やかな錦鯉を他所の池で飼っていたら、年ふるごとに三色がにごって来た。又、木沢の池で飼っ

たら三色鮮やかになったという。

浅間山は宝永元（一七〇四）年と天明三（一七八三）年に大噴火で土まじりの噴煙を四方にとび散らした。

その噴土が地層となり養殖池の底で池水を溜め、錦鯉を色鮮やかにしているのである。

浅間山からの噴土が「木沢粘土」ではなからうか。

日本列島は地震列島でもある。地震ぐらいに負けるな。九州・星野村から、はるばる雪深い土地を求めた先祖に負けるな。

木沢小学校在勤二年九ヶ月、百号までめざした「木沢だより」に、この話を掲載することを夢見ながらなし得なかったことの残念さ。命ある限りがんばろう。



## 「木沢初日」をふりかえり

国立民族学博物館 林 勲 男

私をはじめ木沢に入ったのは、平成十六年十二月初旬でした。最初にお話を伺ったのは、小林あいさんだったと記憶しています。トンネル手前の車庫の整理をされていたあいさんに声をおかけしたら、ご自宅が全壊したこと、鯉やその養殖施設にも大きな被害があったこと、野菜作りや山菜取りが楽しみであるが続けることができずかが心配であることなど、初対面の私にいろいろと話してくださいました。小学校の体育館近くの焚き火に当たりながら、当時の総代さん・星野忠雄さんには、越後三山の冠雪と木沢での降雪時期の関係なども伺いました。初冬の夕暮れにせきたてられるかのように、群馬県からのボランティア一行が最終日の活動を終え、バスで出発しようとしていました。木沢の方たちが手を振って見送る、その様子を少し離れたところから、私は見守っていました。

あれから今まで何度も木沢にお邪魔し、被害の様子や、生活再建のことなどを伺ってきました。その間、木沢を離れる方、ボランティアとしてやってきた大学生、工事関係者、行政の方など数多くの人の行き来に接してきました。今後、木沢というコミュニティの活動には、住民以外の方も多く参加していくことでしよう。私もそのひとりであり続けたいと考えています。



記録集作成で協力をいただいている林先生

## 木沢集落で教えてもらったこと

大阪大学 宮本 匠

木沢でのことをふりかえったときに、最初に思い出されるのが二〇〇五年のよりあいっこ祭です。あの時、ぼくは初めて木沢集落の行事に参加させていただきました。豪雪で、川口駅からタクシーをお願いすると「木沢にはいけない」と断られたことを覚えています。あの時、たしか秀雄さんの家で行われた二次会でしたが「おい、天神囃子を唄おうや」という一声で、「天神囃子」が唄われました。太い男声がおなかのそこから響いてくるその唄に心から感動したことを覚えています。

翌年の春から、僕は長岡に住居を移し、中越復興市民会議のスタッフとして、何度も木沢におじゃまさせていただくことになりました。まず、木沢という土地がどういった地域なのか知りたいと思ひ、木沢で畑をさせていただけませんかとお願ひしたところ、突拍子もないお願ひに、正利さん、区長の幸一さんがひとつ返事で応えてくださいました。こうして、僕の畑づくりがはじまりました。僕の畑の先生は、通りすがりに声をかけてくださる木沢のばあちゃんたちでした。木沢のばあちゃんたちが畑をする姿は本当に格好良く魅力的です。ついつい立ち話が長引くこともありました。また、畑のことをたくさん教えていただきました。畑づくりで思い出すのは、「雨上がりの草ぬき」です。畑づくりが始まってから、僕は、たびたび「おい、草がぼうぼうだいや、草ぬきしれいや」とお叱りを受けていました。そして六月、長い入梅（最初は「にゅーばい」で何や、とハテナマークでした……）の時期、雨が降り続いて畑に行けず、草がぼうぼうに育つのが見ながら、「はやく草をぬかないと怒られるなあ」とやきもきしていました。ようやく梅雨の谷間で雨があがった日、僕ははりきって木沢に向い、まだ湿っている畑の土から一生懸命、雑草をぬき始めました。すると、畑の下から「おーい、ダメダメ」と手をふりながら幸一さんが上がってきます。僕は、久しぶりに畑に来たからほめてもらえるんだと「いやあ、やっと雨が上がって草ぬきが出来ま

すよ」と笑いながら近づいていくと、「ダメだいや、こんな雨上がりに草をぬいても、すぐに根っこを伸ばして元通りに戻ってしまう。草ぬきは天気の良い日にやらねえと。今日はもう無理だから、うちに入ってお茶をのめ」その後、木沢の人から「おめえさん、雨の日に草ぬきしたるい？」と何度からかわれたことかしりません。

お茶のみ、山歩き、木沢小学校のお掃除、道普請、まちあるき……。思い出せばきりが無いほどです。八月の盆踊りで、幸一さんからはつぴを着せていただいたときは、何か自分も木沢の一員になれたようだけれしかったのを覚えています。木沢の盆踊りは難しく、見よう見まねでしか出来ませんでした……。二子山遊歩道の自力復旧では、地すべりしたところに、斜面を削って道を切り開いていくたくましさに、「ああ、きつとあの地震のときの自力復旧の様子も、きつとこんな感じだったんだらうな」と思いました。

実は住居をひきはらって大阪に戻る最後の日、僕はこっそり一人で二子山に登りました。春に感動していた新緑は、すっかり紅葉した落ち葉となつて、僕の足もとに積もっていました。二子山の頂上からきれいな見えたあの越後三山は決して忘れません。

僕が、木沢集落から教えてもらったもの、それは山に暮らすことの「気概」だったように思います。山の豊かさに囲まれ、厳しさに立ち向かう。そこに蓄積されている知恵と、何かあったときには一致団結して助け合う心。そんなことを、僕は畑を耕しながら、二子山を歩きながら、そして囲炉裏端でお茶を飲みながら教えてもらったように思います。

これからも末永くよろしくお願ひいたします。



3年ぶりに木沢へ  
来て、復興を実感するこ  
ができておりました。3年前は  
本々にお世話になりました。  
逆に本当に、ありがたい気持ちで  
いっぱいです。ありがとうございました。長野大学 觸之野翔史

3年ぶりに来ましたが、  
皆さんが変わらず元気なの  
のがうれしかったです。  
月日が過ぎても木沢は  
変わらな...感じでした  
整体士 米田彰彦

思いがけぬ縁も人知れ  
ない思いです。右志  
さん

ボランティア団体として  
木沢に参りましたが、みなさんの  
暖かい心や地域の結びつき  
など、逆に多くのことを学ば  
せていただいたように思います。  
おかげさまで木沢の次の  
発展を心より願っております。  
東京農工大学 新潟協働隊代表  
氏橋 充介

結

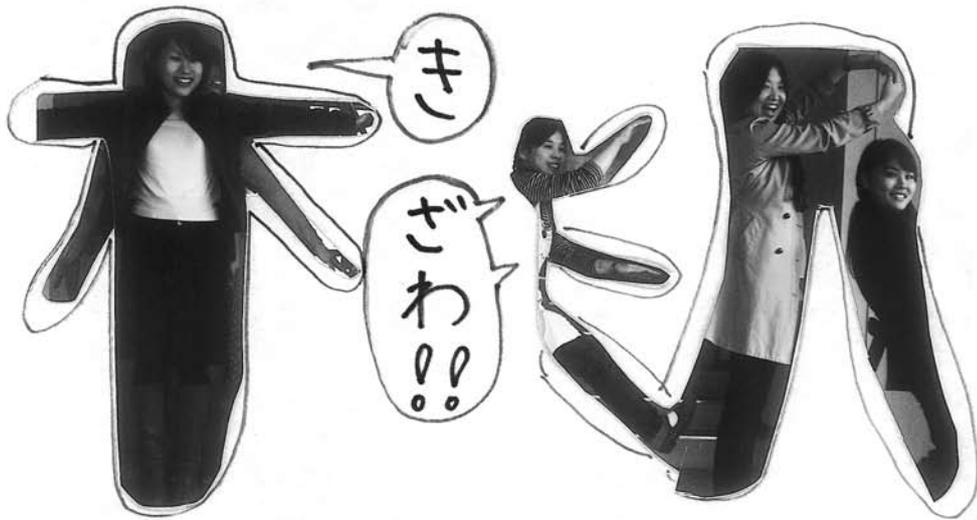
今日と言う日に呼んで頂き  
有難うございます。た  
皆さんにお会い出来、又元気を  
頂く事が出来ず、何もお手紙  
出すにいたのに何となくつかしい気分  
して3年の月日を感じます  
私を成長させて下さった木沢の  
皆さんに感謝しております  
長 碧 都

縁あって、木沢にボランティアを  
派遣することになり、隊員各々、  
とても良い経験をして頂きました。  
それも、木沢の皆様のご親切の  
おかげだと、一同思っています。  
ありがとうございました。  
東京農工大学 米田 里美

木沢の皆さんと出会いは私の宝物です！  
どれだけ感謝を述べても足りないくらい  
感謝しております♡  
木沢の皆さん♡の頑張りを皆さんに  
私もおんぼろします！ 澤田妙子 (いらこ)

平成19年10月27日・28日両日、  
当時ボランティアとして協力いた  
だいた皆さんと旧木沢小学校で再  
会。メッセージをいただきました。





木沢大好き!!!  
from HUS

豊かな自然、  
美味しいお海と  
山菜、そして何と  
言っても、あたたかい  
木沢のお父さん、  
お母さん!!!いつも  
ありがとう♡  
木沢は私の第2の  
故郷です。  
これからもお世話に  
なりたいです!!  
久保エリコ



木沢のみねさん  
木沢へは毎年2,3回  
しか行ってたんですが、  
いのですが、それぞれ  
行くときはおいしいご飯  
を木沢に木沢の皆  
さんとお話をきく  
のを楽しみにして  
います!!  
桑山園美

木沢1つはたまにはいつも  
お世話になります。木沢へ行くと  
元気がたくさんたかさんいただきます。  
またお邪魔しますので、相手して  
やって下さいね♡の中西理利

いつもお世話になっています。  
豊かな自然と、あたたかいお父さん  
お母さんのいる木沢に行くといい思い出  
が力になります♡これからもよろしく  
お願いいたします!! 長谷川優

♡木沢のみねさん  
いつもお世話になっています。  
木沢のみねさんと  
お会いして2年、気がく  
まに木沢に行きたい  
な気持ちでいっぱい  
です♡お会いできるの  
が楽しみです♡  
小西 桃



ボランティアのHUS（大阪大学）さん達から直筆メッセージ

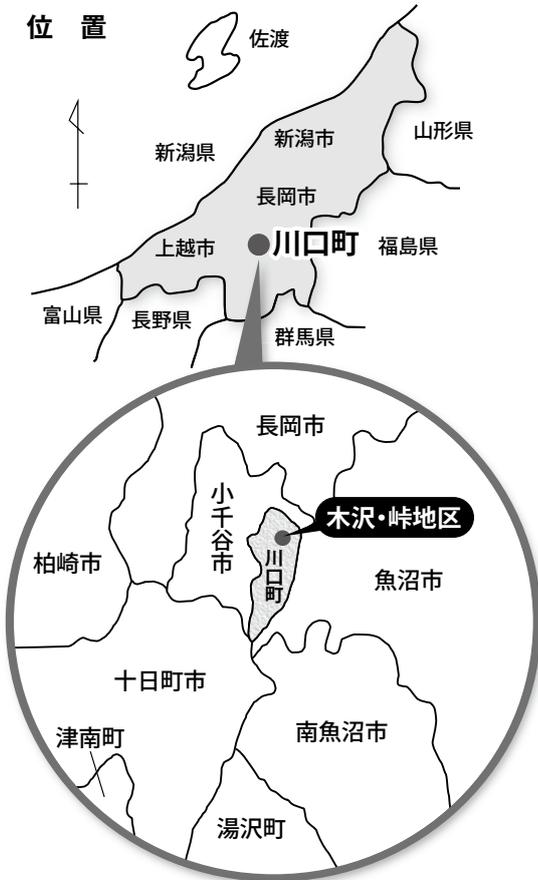


新潟県中越大震災の

概要と軌跡

新潟県中越大震災の概要

1. 木沢・峠地区の位置と震度分布



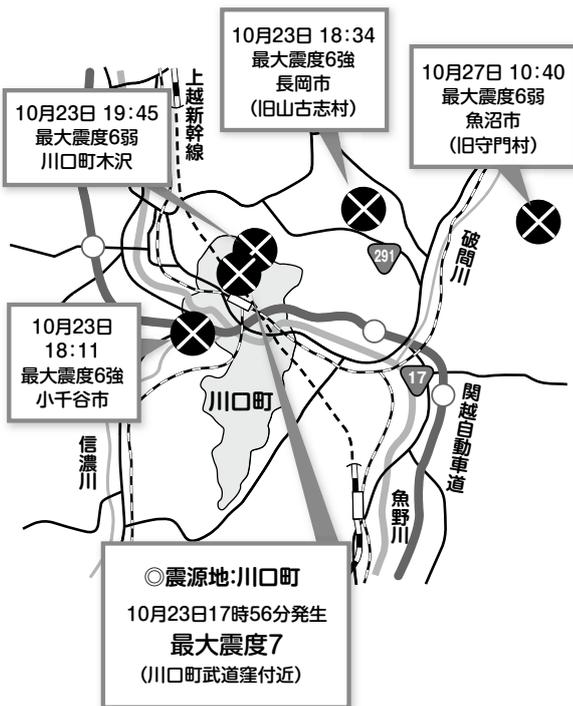
10月23日の震度7・震度6強の地震  
(震度5弱以上の主な地点)



午後5時56分ごろ

凡例  
 \* 震源地  
 7 震度7  
 6 震度6強  
 6 震度6弱  
 5 震度5強  
 5 震度5弱

2. 震源と震度



震度5以上を観測した地震 (気象庁データによる)

震源時		マグニチュード	震源の深さ(km)	最大震度
月日	時分			
10月23日	17:56	6.8	13	7
	17:59	5.3	16	5強
	18:03	6.3	9	5強
	18:07	5.7	15	5強
	18:11	6.0	12	6強
	18:34	6.5	14	6強
	18:36	5.1	7	5弱
	18:57	5.3	8	5強
	19:36	5.3	11	5弱
	19:45	5.7	12	6弱
10月24日	14:21	5.0	11	5強
10月25日	0:28	5.3	10	5弱
	6:04	5.8	15	5強
10月27日	10:40	6.1	12	6弱
11月4日	8:57	5.2	18	5強
11月8日	11:15	5.9	ごく浅い	5強
11月10日	3:43	5.3	10	5弱
12月28日	18:30	5.0	—	5弱

※網掛けは震度6以上

### 3. 被害の状況

#### ① 人的被害（町全体）

平成20年1月31日現在

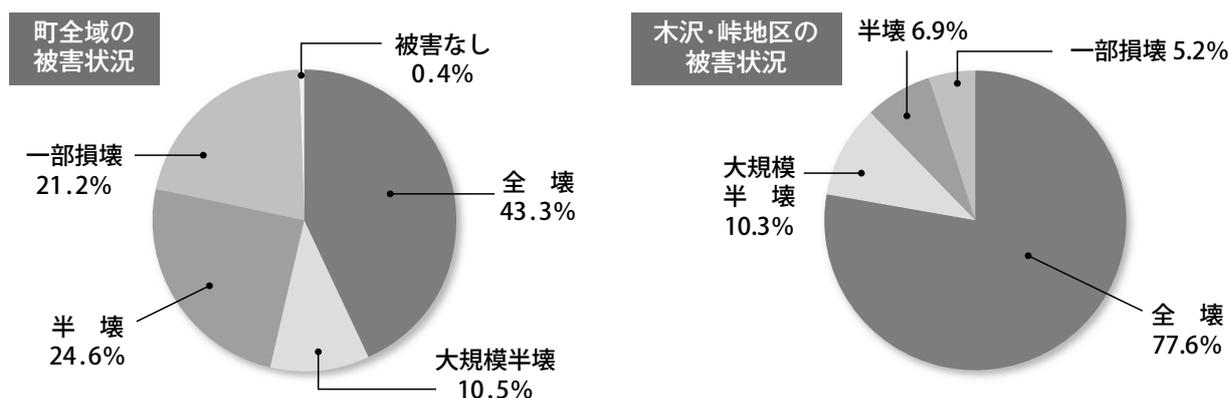
区 分		原 因 ・ 症 状	
死 亡	6 人	倒壊家屋の下敷など。（内木沢で1名死亡。）	
負 傷	重 傷	38 人	やけど、骨折等
	軽 傷	24 人	打撲等

#### ② 住宅の被害状況

平成18年1月1日現在

地区別	被 害 内 容					合 計
	全 壊	大規模半壊	半 壊	一部損壊	被害なし	
和 南 津	77棟	8棟	14棟	14棟	0棟	113棟
中 山	42	7	30	28	0	107
東 川 口	163	38	102	55	0	358
西 川 口	50	34	93	134	3	314
牛ヶ島	17	25	48	25	1	116
武 道 窪	22	6	14	3	1	46
相 川	28	11	25	31	1	96
荒 谷	8	6	6	1	0	21
木 沢 ・ 峠	45	6	4	3	0	58
田 麦 山	154	6	8	2	0	170
町 全 域 (比率)	606 (43.3%)	147 (10.5%)	344 (24.6%)	296 (21.2%)	6 (0.4%)	1,399 (100%)

#### ③ 構成比



### 4. 人口・世帯の変更

	木 沢		峠		合 計	
	人 口	世 帯	人 口	世 帯	人 口	世 帯
平成16年9月末	138	52	12	4	150	56
平成19年9月末	96	39	1	4	97	43

(資料/川口町)

# 新潟県中越大震災発生後からの軌跡

## 川口町全体

平成16年

10/23

17時56分

・中越地震発生（震度階級7、マグニチュード6.8）

18時34分

・最大余震 震度6強  
（最大速度秒速七二cm、加速度二五二五ガル）

19時00分

・町災害対策本部設置

・川口橋通行止め

19時30分

・全戸に避難勧告（一五九五世帯、五六九二人）  
（16年9月30日現在 住基人口）

・西倉橋通行止め

・上越線不通（越後川口駅長）

・和南津トンネル崩落

・国道17号他各主要道路通行止めとなる（町孤立化）

16時30分

・東京狛江市支援第一陣到着

・陸上自衛隊派遣される

（高田第一普通科連帯、広島十三旅団、大阪第三師団）

10/25

10/24

平成16年

10/23

19時30分

・集会所前で多数避難  
（24日まで）

・住宅の下敷きにより  
一名が犠牲となる

・旧木沢小学校へ避難場所を移動

・武道窪へ通じる県道の自力復旧  
スタート（午後から作業開始）

・町からの炊き出し始まる

8時30分

・狛江市が持参した仮設トイレ

・二基が搬送され組立設置される

・峠地区に避難指示（三世帯、二人）

10/26

10/26

13時20分

・峠地区に避難指示（三世帯、二人）



## 木沢・峠地区

10/27

- ・魚野川河川敷に臨時入浴施設設置（28日午前10時より開放）
- ・災害救助法適用の通知（適用年月日↓平成16年10月23日、18時00分）

20時06分

10/29

- ・国道17号小千谷方面一般車両通行止め解除
- ・魚野川河川敷に臨時入浴施設設置（二基目）
- ・陸上自衛隊宿営テント設置（町内七箇所、二〇〇張り）

10/30

- ・川口町災害ボランティアセンター設置
- ・ごみ収集開始

10/31

- ・泉田新潟県知事現地視察
- ・全町で電気が概ね復旧（小高の一部、中山の一部を除く）

11/1

- ・役場窓口業務の再開

11/2

- ・建物の危険度判定調査開始

16時20分

- ・国道17号魚沼市方面一般車両片側交互通行開始
- ・家屋被害調査開始（11月4日～中旬）

11/6

- ・天皇・皇后両陛下被災者お見舞い（川口中学校避難所）

16時30分

11/8

- ・町内全小中学校を再開
- ・仮設住宅の建設に着手（川口中学校）

10時30分

- ・泉田新潟県知事現地視察

11/9

- ・宅地の危険度判定相談開始

10時30分

11/11

- ・10時30分
- ・泊江市消防団長来町

11時00分

- ・大字総代会（第三回目）↓毎週火曜日・金曜日（午前10時から）

10/29

- ・避難所用のゴザが運ばれる

10/30

- ・ボランティア活動が始まる
- ・避難所用テント二基設置される

10/31

- ・電気の復旧

11/4

- ・家屋被害調査実施（11月4日～）

11/8

- ・川口小学校で授業再開。木沢から通学（11日から自衛隊車両で送迎）

10時30分

- ・泉田新潟県知事現地視察 木沢集落へも訪れる

11/10

- ・タレント清水国明さん来訪

10時30分

11/11

- ・10時30分
- ・木沢水道復旧

10時30分



平成16年

## 川口町全体

- 11/13
  - ・JR上越線の代行バス運転開始  
(六日町駅～小出駅間始発から運転再開)  
(小出駅～長岡駅間でバスによる代行輸送開始)
- 11/14
  - ・下水道と水道一部地域を除き復旧  
(14日～16日かけて順次水道の開栓作業を行い給水を開始)
- 11/15
  - ・学校関係簡易給食開始
- 11/16
  - 14時00分
  - ・峠地区、小高地区、向山地区、荒谷地区を除き避難勧告解除  
(解除地区 一五三七世帯 五四五六人)
- 11/19
  - ・ガス供給一部地域で開始(上川地区など二〇〇戸余り)
- 11/20
  - ・罹災証明発行開始(20日～23日)
  - ・家屋被害調査集計結果公表
- 11/22
  - 17時56分
  - ・一時保育開始
  - ・慰霊のための黙祷(地震発生から1か月)
- 11/25
  - ・仮設住宅入居決定通知の交付と入居説明会開始(25日・26日)
  - ・住宅応急修理、生活再建支援等相談窓口開設(25日～12月1日)
  - ・家屋被害再調査受付(11月25日～11月30日)
  - ・激甚災害特例法の適用を受ける
- 11/26
  - ・家屋被害調査再調査開始(12月1日～5日)
- 12/1
  - ・仮設住宅の入居開始  
川口中学校、和南津農村公園、木沢
- 12/2
  - ・仮設住宅の入居開始

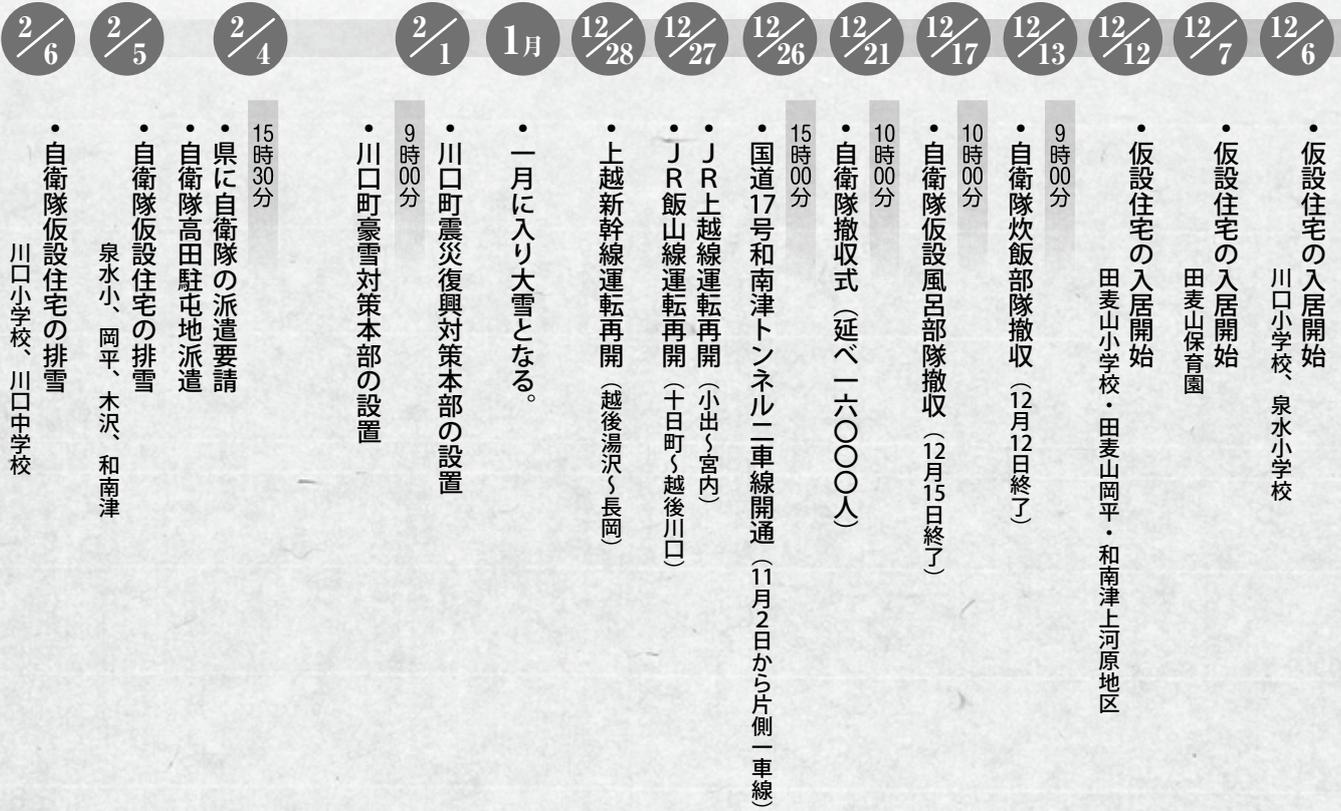
平成16年

## 木沢・峠地区

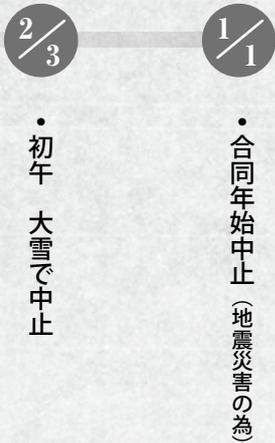
- 11/14
  - ・旧木沢小学校避難所へ仮設風呂設置(練馬区)
- 11/16
  - 14時00分
  - ・木沢地区避難勧告解除 8～9割自宅へ
- 11/19
  - ・牛ヶ首經由県道開通
- 11/20
  - ・仮設住宅建設開始
- 11/21
  - ・木沢で罹災証明発行
  - ・自衛隊による演奏会開催
- 11/30
  - ・木沢・峠地区の住宅応急修理、生活再建支援等相談窓口開設
- 12/1
  - ・峠地区の避難指示解除(三世帯・一六人)
- 12/2
  - ・仮設住宅の入居開始



平成17年



平成17年



平成17年

川口町全体

2/7

- ・自衛隊仮設住宅の排雪  
川口中学校 完了撤収

2/26

- ・「元気がわぐち！フェスタ'05」開催  
(北魚沼商工会青年部連絡協議会主催)

3/12

- ・震災復興とまちづくり講演会

4月

- ・町震災復興計画策定開始

5月

- ・小高地区集団移転先決定  
(西川口岩出原地内)

6月

- ・ガス・水道・下水道復旧工事本格化

6/28

- ・梅雨前線豪雨(総雨量二〇〇ミリを記録)で被害発生

7/23

- ・健康増進回復施設(温水・プール)  
リニューアルオープン

7/23・24

- ・復興祈念「川口まつり」を開催



平成17年

木沢・峠地区

2/12

- ・十二講 大雪で中止

2/18

- ・タレント杉良太郎さん・歌手伍代夏子さん 震災見舞で来訪

2/20

- ・復興まつり「がんばろう木沢」

4/24

- ・大震災復興支援  
「春の民謡まつり」(体育館)

6/12

- ・復興祈念「運動会」開催

8/19

- ・中越地震慰問公演  
松田隆行(津軽三味線奏者)コンサート



平成18年

2/11

2/6

1/11

1/6

12/28

11月

10/30

10/23

10/22・23

10/17

- ・最高積雪深、役場二九八cm、  
田麦山小学校三三〇cmを記録
- ・「雪洞火ほたる祭」主要行事の中止
- ・各地域で雪灯り回廊や  
雪灯りアートで希望の灯りを点灯

- ・災害救助法の適用
- ・雪害対策本部を設置
- ・12月としては稀な2mの積雪に豪雪警戒本部を設置

- ・新潟県中越大震災震災体験集  
「震度7!その時わたしは—忘れない大震災の記憶—」を発行
- ・「震度7!その時わたしは—忘れない大震災の記憶—」を発行
- ・町営よしみ住宅の再建着手

- ・震災復興祈念「秋まつり」を開催
- ・中越大震災一周年復興祈念式典
- ・川口町震災復興計画を策定
- ・'05かわぐち体験防災キャンプ  
22日:感謝の人文字 震災を語る会  
23日:本震震源探索ハイキング



平成18年

2/11

1/27

12/11

12/7

10/22・23

9/21

- ・雪灯り回廊や雪灯りアートで  
希望の灯りを点灯

- ・第二回  
「復興地域づくり」懇談会

- ・震災復興祈念「寄りあいつこ」開催

- ・第一回「復興地域づくり」懇談会

- ・'05かわぐち体験防災キャンプ  
本震震源探索ハイキング地区参加

- ・狛江市民との「寄りあいつこ」開催



平成18年

## 川口町全体

3/25

・中越地震災害調査結果報告会開催（学習センター）  
（主催：産業技術総合研究所、防災科学技術研究所、新潟大学）

3/26

・第一回「集落夢づくり交流会」開催  
（中山集落開発センター）

4/1

・東川口震災復興委員会全体会を開催  
（17年12月からの活動報告会）

4/16

・田麦山地域づくり団体  
「つきつき田麦山」発足

6月

・長野県豪雨災害発生で町から  
災害ボランティアを派遣

7/29:30

・「川口まつり」を開催  
町民号「エピセンタ（震災）」を打ち上げ

8月

・小高集団移転地造成工事が完成、年末までに十八世帯が移転  
り災者公営住宅、牛島・相川・和南津・田麦山、  
計二十三戸が完成（9月1日から順次入居）



平成18年

4月

・本格的な道路復旧始まる（4月～12月）

5/25

・学生ボランティアとの交流畑づくり（5月25日～11月未まで）

6/17

・「視察研修」長岡市法末集落  
（空校舎の活用）

7/17

・まち歩き「木沢探検ウォーク」



8/20

・二子山遊歩道自力復旧作業

8/24

・「木沢いいとこどりマップ」の  
作成（8月24日～11月20日）

9/15

・県地域づくり研修ツアーでの  
昼食提供

10/11

・NHKラジオ  
「80ちゃん」木沢で収録



## 木沢・峠地区

平成19年

2/25

- ・農事組合法人「ファーム西川口」発足
- ・少雪により「雪洞火ほたる祭」中止（各地区で独自開催）

1/14

- ・荒谷集落で三年ぶりの「さいの神」を実施

12/23

- ・小規模改良住宅小高住宅（四戸）完成  
入居開始（西川口若出原移転先）

12/16

- ・り災者公営住宅「西川口完成」入居開始

11/26

- ・「和南津そばまつり」開催  
（和南津そばの郷主催）

11/20

- ・「町営よしとみ住宅」完成  
入居順次開始

10/23

- ・泉田県知事  
り災者公営住宅を訪問（貝ノ沢）

10/22

- ・中越地震復興チャリティーコンサート  
（チエロコンサート・田麦山）

10/21

- ・「絆の道ウォーク」開催（和南津地区）

10/14-15

- ・'06かわぐち体験防災キャンプ  
「キッズ・トライ・キャンプ in 木沢」  
「イザ！カエルキャラバン in かわぐち」を実施



平成19年

2/17-18

- ・「中越復興交流会議」への参加（長岡市）

2/14

- ・女性お茶のみ座談会

12/23

- ・震災で水源が枯渇、木沢簡易水道を中央簡易水道に統合

12/10

- ・木沢・峠集落「復興祭」開催

10/29

- ・「運動会」開催

10/14-15

- ・'06かわぐち体験防災キャンプ  
「キッズ・トライ・キャンプ」受け入れ



平成19年

## 川口町全体

3/25

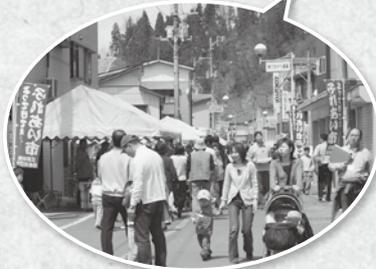
- ・第二回「集落夢づくり交流会」開催（和南津集会所）
  - ・小高地区防災集団移転事業完了  
（十九区画宅地造成、公営住宅四戸、集会施設一棟）
- 地区名を「西川口小高」に決定

4/15

- ・第一回「よつてげてえ〜ふれあい市」開催  
（以降毎月第三日曜日に開催）
- ・「山菜ツアー」開催（はあ〜とふる荒谷塾）
- ・「春の田麦山自然塾」を開催  
（田麦山大谷内地区内）

4/29

- ・「田植え体験交流」開催  
19日：グループファーム武道窪（練馬区より）  
20日：グループファーム武道窪（狛江市より）  
ファーム田麦山（県内生協組合員）



7/16

- ・中越沖地震発生  
10時13分

7/21

- ・滞在型宿泊施設災害復旧工事完了・オープン  
「えちご川口ホテルサンローラ」に名称を変更

7/28・29

- ・「川口まつり」開催



平成19年

## 木沢・峠地区

3/25

- ・豆おとしの会
- ・第二回「集落夢づくり交流会」参加（和南津集会所）

4/7

- ・長岡子育てライン「三尺玉ネット」交流打ち合わせ

5/27

- ・長岡子育てライン「三尺玉ネット」との交流  
「畑づくりツアー」開催



8/1

- ・桜華女学院中学校の  
自然体験学習  
（8月1日〜3日）

8/2

- ・富士常葉大学、視察で  
集落を来訪



8/6~9

- ・中越沖地震被災者支援ボランティア活動実施  
(町社会福祉協議会呼びかけ)

9/18

- ・地域づくり団体等で組織する  
「えちご川口交流ネットREN」を設立
- ・「おかげ様感謝デー」  
感謝のはがき郵送(二万枚)

10月

- ・全町で黄色いフラッグ(感謝のフラッグ)  
大作戦を実施(10月中継続)

10/7

- ・中山ふるさと夢づくりの会  
「秋まつり」開催(中山さんご山「旧スキー場跡」)

10/13

- ・東川口り災者公営住宅完成、入居始開始  
震災復興「おかげ様感謝デー」

10/14

- ・各地区で感謝イベントを開催(10月13日~22日)
- ・「震度7の町」感謝と復興への記念式典開催(学習センター)
- ・中越地震震央にモニメント設置(武道窪地内)

10/20

- ・狛江市・川口町ふるさと友好都市  
提携二十周年記念式典挙行(中山・杜のかたらい)



8/5

- ・二子山遊歩道の自立復旧作業(全線開通)



9/1

- ・第二回「地域復興交流会議」へ参加(中山・杜のかたらい)

9/2

- ・上越市安塚区坊金集落・細野集落を視察研修

9/7

- ・狛江市との「寄りあいっこ」に参加(中山・遊亀庵)

9/14

- ・長岡技術科学大学の学園祭「技大祭」に参加

10/13・14

- ・'07かわぐち体験防災キャンプ  
「キッズ・トライ・キャンプin木沢」



10/19

- ・狛江市の市長と  
議会の方が木沢を訪問



平成19年

川口町全体

12/19 12/12 11/21 11/11 10/28 10/23

- ・震災三周年追悼式を開催（川口中学校）
- ・中越大震災  
中越沖地震復興祈念「物産展」開催  
（えちご川口ホテルサンローラ前駐車場）
- ・13年ぶりに  
「狛江わんぱく駅伝」に参加（狛江市）
- ・はあくとふる荒谷塾  
東京都墨田区京島地区の文化祭に参加  
物産の販売実施
- ・町地域復興支援センター開設  
（西川口・農村総合振興センター内）
- ・町地域復興支援センター閉所式  
（西川口・農村総合振興センター内）
- ・「えちご川口ホテルサンローラ」  
研修棟完成グランドオープン



平成20年

平成19年

1/22 1/16・17 1/9 12/18 12/14 11/24

- ・「寄りあいっこ」の開催
- ・第一回「復興デザイン」会議
- ・長岡子育てライン「三尺玉ネット」との交流  
「しめ縄づくり」（長岡市）
- ・長岡子育てライン「三尺玉ネット」との交流  
「もちつき大会」（長岡市）
- ・復興支援感謝で大阪・兵庫を訪問
- ・第二回「復興デザイン」会議（以降毎週月曜日に会議）



今後も木沢・峠地区は元気いっぱい活動していきます！

木沢・峠地区



あれから3年

2007 木沢・峠から…  
みんなで頑張ってます!



# ・峠から… 張ってます!





# 2007 木沢 みんなで頑



- Ⓐ…不動林(8月)
- Ⓑ…桜華女学院中学校(東京)ホームステイによる  
自然体験学習受入れ(8月・29名)
- Ⓒ…寄りあいっこ(11月)
- Ⓓ…ベルフラワーの会 花の苗植え(5月)
- ⒺⒻ…長岡子育てライン「三尺玉ネット」  
畑づくりで交流
- Ⓖ…心のふるさととしてみなさんの力で峠の神社を  
再建することができました。よろこびの面々。
- Ⓗ…大運動会(6月)
- ①…「三尺玉ネット」しめ縄づくり交流  
(12月・長岡 多世代交流館「になニーナ」)
- ②…「三尺玉ネット」もちつき交流  
(20年1月・長岡 多世代交流館「になニーナ」)



# 震災の傷跡から復旧へ

牛ヶ首



新 道



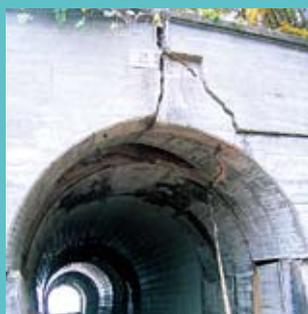
十二神社



鳥 居



木沢隧道



水 田



武道窪への道路1



武道窪への道路2





- ①…大阪大学で馴染みの学生たちと
- ②…兵庫県主催の「ひょうご安全の日のつどい」で物産販売を実施
- ③…西宮市の復興住宅入居者の皆さんと交流
- ④…西宮の皆さんから手彫りの「観音様」の贈り物が(同会場で)
- ⑤⑥…神戸・東遊園地での「1.17のつどい」

## 阪神淡路大震災被災地訪問

### — 木沢から神戸へ —

大阪大学の宮本匠さんたち、学生ボランティアとの交流が縁で、阪神淡路大震災の被災地を、13周年となる1月17日に合わせて訪問してきました。

大阪大学での交流会や神戸・東遊園地での「1.17のつどい」への参加、西宮市の復興住居入居者の皆さんとの交流、また、兵庫県主催の「ひょうご安全の日のつどい」での物産販売と、参加者18名、片道8時間の道のりも苦にせず、これからの繋がるいろいろな体験、交流をしてきました。



# 川口町 木沢・峠 MAP

## いっとこどり



不動林の棚田

ビューポイント

中越大地震震源地(震央)

H16.10.23 PM5:56発生  
M6.8・震度7



武道窪・小千谷市方面



被災道路自力復旧地



圓柳寺



音蔵商店

名水長寿の水



川口町フォトコンテスト入賞作品

牛ヶ首集落

川口温泉・魚沼市方面



二子山遊歩道

二子山 433.5m

木沢焼窯場



十二神社

公民館  
(旧木沢小学校)

木沢会館  
よろみ

木沢キムチ

どげんの野づつ  
(ツチノコ伝説)



八丁とんぼの  
生息地(2cm)

日影・不動林方面

小千谷市塩谷方面

二十村最古の  
闘牛場跡

峠の地藏様

峠集落

木沢トンネル

旧木沢隧道



峠の不動様



木沢の大ケヤキ



塩谷川砂防えん堤(中越大地震による工事)

われらが木沢・峠!  
元気いっぱい!



福松

星野悦幸  
子一



鹿蔵

小林四郎



中村家持

星野  
香美克栄忠  
拓純那子也子雄



喜右工門

星野福太郎

われらが木沢・峠!  
元気いっぱい!



ウネ蔵

星野  
春吉  
和子



長兵衛

星野  
正夫  
文江



四郎八

阿部  
和雄  
毛卜



富蔵家持

間野  
慶作  
七幸

われらが木沢・峠!  
元気いっぱい!

四郎右エ門家持



星野正秀  
子雄

甚平家持



星野藤一

十二ノ脇



星野正良  
カヲル

観音



阿部信義  
郁子子夫

われらが木沢・峠!  
元気いっぱい!



星野サト

又蔵



星野正孝  
かづ枝

ガニワラ



星野利春  
夕ラ

藤蔵



小林正利  
ミツ子  
司

木挽(コビキ)

われらが木沢・峠!  
元気いっぱい!

為吉



星野 主税

ミセ



星野 三ノ武

銀蔵



星野 幸二郎  
イツ

四郎右エ門家持



星野 隆一  
春子  
虎太郎  
千春  
純平  
和子

われらが木沢・峠!  
元気いっぱい!



万平

星野  
善辰  
チイ



万七

星野  
計次郎  
智恵子



坊村

星野  
スミエ  
靖



伴蔵

小林  
勇二  
恵子

われらが木沢・峠!  
元気いっぱい!



星野  
伸一  
デー

与五郎



星野  
隆則

四郎右工門



星野  
総一郎  
ク実二

長左工門



星野  
幸久  
樹  
幸枝

政兵衛

われらが木沢・峠!  
元気いっぱい!



仙助

小林 三三三



忠吉

星野

智雄 良忠  
子太 子明



子之兵衛

星野 達也  
栄子



益次郎

星野  
マサ晋

われらが木沢・峠!  
元気いっぱい!

圓柳寺



古田  
泰祐  
子豊

音蔵



小林  
美知江  
繁男

万平家持



星野  
光治

清八



小林  
七二 栄清  
郎 丰子 一郎

われらが木沢・峠!  
元気いっぱい!



弥五右エ門



弥吉



富蔵



長蔵

われらが木沢・峠!  
元気いっぱい!



星野  
京子 寛吉

権  
平



亀  
三

星野

亀美直美  
三希希子 勇



# 新聞報道された木沢・峠

---

# 新聞報道

読売新聞社  
平成16年10月28日(休付)

中越地震の被災地では今も、約三百人の陸自隊員が活動する。家族を離れて残したまま任務にあたる男性隊員、イラク派遣から休む間もなく新潟入りした隊員もいる。新潟・復旧活動に立ち向かう彼らの姿を追った。

## 避難所に家族残して

## サマワから離任直後

### 被災地で活躍 陸自隊員

先月十九日、川口町を襲われ、やれた父親の痛感だ。一筆も高台で、第二旅団 言葉は強かった。先遣の部隊 普通科連隊情報小隊 情報隊は、いまだ現地(新潟市)所属の同部隊の状況を探る「目」である。新潟曹(29)は息をのんだ。同時に被災地を西をたぐり、古里の町並みは大きく代わる「目」である。一方、復旧活動に立ち向かう彼らの姿を追った。

イラク、新編で活動する前より支援に当たる自衛官「さか」が「バススター」を担いでいるが、「今は本気で困っている人が主役で、除く支えることこそが自衛隊の役目」といふ。

先月十九日、川口町を襲われ、やれた父親の痛感だ。一筆も高台で、第二旅団 言葉は強かった。先遣の部隊 普通科連隊情報小隊 情報隊は、いまだ現地(新潟市)所属の同部隊の状況を探る「目」である。新潟曹(29)は息をのんだ。同時に被災地を西をたぐり、古里の町並みは大きく代わる「目」である。一方、復旧活動に立ち向かう彼らの姿を追った。



先遣隊として被災地に入った河野(左)と小谷(右)。



入浴を待つ児童(新潟市)。

新潟中越地震 \* 自衛隊の車で通学  
新潟県中越地震で震度7を記録した川口町。その山あいの集落に住む子どもたちが自衛隊の大型四駆「高機動車」で通学している。同町木沢地区の小中学生は7人。震災前はバス通学だったが、路線だった県道は通行止めのまま。町教委の要請で11日から走り始めた高機動車は、別の県道を巡回している。19日も、今年春に廃校になった旧木沢小学校前から、濃緑色の高機動車が午前7時半に出発。幌(ほろ)付きの荷台の長いバス、川口小と川口中に通う7人が向かい合わせに座った。学校までは約50分。車が道路の崩落部分を避けてジグザグに進むと、子どもたちの体は上下左右に揺られていた。被災地のすべての学校が授業を再開して2週間。他の市町村でも、バスやタクシーによる遠距離通学を余儀なくされているケースが少なくない。 <関連記事18面>



自衛隊の高機動車で学校に到着した木沢地区の子どもたち(午前8時20分、新潟県川口町で)

読売新聞社  
平成16年11月19日(休付)

▼読売新聞社 平成16年11月付

新潟県中越地震で震度7を記録した川口町の木沢地区(五十三世帯)。町に通じる二つの県道が陥没、通行不能となって孤立した。

ふもとからの救援は来ない。水も食料も底を尽き、体調を崩す人も出た。「このままでは、みな死んでしまう」。地震発生から三日後の先月二十六日、地区の役員たちは自分たちで道路を作り直すことにした。幸いパワーショベルやダンプがあつた。その日のうちに取りかかり、陥没したアスファルトをはいで砂利を入れ、でこぼこをならしていった。

### 交差点

#### 被災地から

#### \* 団結力

陥没は計十一か所。十層にわたる所もあった。余震が続く、新たな土砂崩れや陥没が起きる危険の中で作業は続いた。男性の一人は

「正直、怖かった」と打ち明けたが、それでも「復旧しなければ、集落は終わり」との思いが勝ったという。日没後も工事を続け、その日のうちに乗用車が通れるまでになった。作業は三日間で計一千一人がかか時間、延べ五十一人がかか



わった。住民が一致団結した結果」。指揮を執った星野国樹さん(58)は胸を張る。

地震は地区に大きなつめ跡を残した。強い揺れで井戸と各戸をつなぐ配水路が壊れ、豊かだった伏流水がみるみる減った。生活への影響はもちろん、美しい棚田が失われる可能性もある。

初老の男性が唇をかみしめた。「これからが正念場だ」。団結力が必要な危機はまた終わっていない。(竹原 興)





# 震度7の町

2

## なじんだ面影 ためらい続く



「余震はいつ終わるんだろね」。小林美知江さん(右)の雑貨屋で話らう小林恵美子さん(右から2番目)と星野邦子さん(左から2番目)川口町木沢の「音蔵商店」

「隣の邦子が買物に出ることも音がしなくなるの」。ただそれだけで寂しさが募る。

三十数年前、姉は嫁ぎ、妹が美家を継いで母キチさん(ハコ)と暮らす。同じ集落内、一緒に山菜を採り、互いの家を行き来してきた。しかし地震でそれぞれの家は全壊し、取り壊した。

美知江さんは「一緒にここで年を取ろうって」と声を掛ける。子どものころから赤い服を着て女性陣の先頭に立つ美知江さんと、おっとり型の恵美子さんは気が合った。

二人は集落を出る人を指折り数えてみた。「邦子でしょ、あとは…」。右手の指は「往復半し

た。

# つらい 集落との別れ

## きずな

「(一)ぎ(大雪)な雪だねえ。水害と地震と雪で神様は何考えているんだ。」

途中であげどこの手当てをしてもあつたことや、美知江

さんらと本震翌日に炊き出しをしたことも。美知江さんは恵美子さんのほおを何度もひっぱたこう

さんらと本震翌日に炊き出しをしたことも。美知江さんは恵美子さんのほおを何度もひっぱたこう

状況がみられる。ケアチームが中越地震で診察した総数は六千件以上。診断別の統計はないが、不安

や恐怖、無気力を訴えた人は二割を超えた。県精神保健福祉センターによると、記憶に障害が残るケースもありうるという。「件数はあまりないが、大変な体験をしたときに起きることがあ

だが、今度はこれからの

を迫られていた。

## 心のケア

被災による精神的ストレスから引き起こされる心の病に対し、早期発見、治療の必要性が求められている。県が中越地震被災地に派遣した精神医療者の39チームは昨年10月26日～1月22日に6451件を

診察。主な症状は不眠1824件、不安・恐怖1793件、イライラ258件、無気力204件、抑うつ107件、幻覚・妄想52件。65歳以上では物忘れの症状が50件あった。



# 震度7の町

3

容赦ない雪。北魚川口町木沢集落は、ふもとに下りる一本の県道が一夜で埋まる。命をつなぐ道を守るべく、住民は集落の底力を見せて早朝からパワショベルやロータリー除雪車を走らせる。大地の揺れは道路を寸断した。孤立した住民は損壊した家を選び、地震発生から一晩、野宿しながら支援を待った。井戸道荒谷・竜光線に向かった。ふもとの武道窪地区まで、曲がりくねった約1.5kmの坂道。約五十軒も道路が崩落している場所もあった。

「もう回ルートをくぐるため、新たに山を切り崩した。壊れた舗装をはがし、その下から掘り出した砂利を敷いた。余震は続いて」

「まず道をはたき、土を敷いて、雪を溶かす。集落内には7、13水害で崩落した道路の復旧に使っていた五台の重機があった。十数人が集落西側の県道に集まり、雪を溶かす作業を行った。約1.5kmの坂道。約五十軒も道路が崩落している場所もあった。

「もう回ルートをくぐるため、新たに山を切り崩した。壊れた舗装をはがし、その下から掘り出した砂利を敷いた。余震は続いて」

## 復興へ 中越地震

# 崩落道路自力で修復

## 生命線

「雪が解けたら、次は田んぼを直さんといいねえ。繁男さんはつづやう。雪で集落が再び孤立しかねない。今はひたすら大きな雪壁と闘っている。」

繁男さんに十年前の記憶がよみがえった。数人の仲間と冬期間、兵庫県の明石市のゴルフ場へ出稼ぎに行っていた。未明に突然、大地が揺れた。阪神・淡路大震災。ビルが倒れ、高速道路が割れた。

まさか、再び同じ体験をするとは思わなかった。だが、「こっちの揺れの方向がさっき(大変)だった」。妻の美知江さん(55)は女性陣の先頭に立ち、路上で炊き出しを行った。



地震の崩壊から復旧させた生活道路を確保するため、集落の男たちは除雪作業に奔走する川口町木沢

日が暮れたら、応急道路が完成。仲間が役場へ向かい、ベットポトルに入った水や毛布を持ち帰った。お年寄りに血圧の薬など、常備薬が届いた。美知江さんは「やるべきはやるね」と繁男さんの顔をのぞきこんだ。「これで助かった」。住民はコミュニティーの力を実感した。

柱が傾いた自宅の雑貨屋「音蔵商店」からレトルトカレーを引っ張り出し、みんなで食べた。相次ぐ余震でみんなの顔がこわばっていた。「このままじゃみんながまいてしまう」。重機のハンドルを握る繁男さんの手に汗がにじんだ。

## 寸断

県などによると、川口町の道路被害は国県道が約72億円、町道が約25億円に及ぶ。大動脈の国道17号は、東京方面が和南津トンネルの崩落で寸断し、

新潟方面も小千谷市の土砂崩れで1週間不通となった。同トンネルは11月2日、片側交互通行で再開。同町でガスと上下水道がほぼ復旧したのは、地震から1カ月余りたってからだった。

▼新潟日報社 平成17年2月20日(日)付



## 除雪で“大立ち回り”

杉良太郎さん  
伍代さん夫妻 川口の被災者激励

俳優杉良太郎さん、歌手伍代夏子さん夫妻が十七、十八の両日、北魚川町を訪れ、中越地震の被災者を励ました。町復興ボランティアセンターで登録もし、積雪四尺の同町木沢では約一時間、

ボランティアと一緒に息を切らしながら除雪作業をする杉良太郎さん(右)と伍代夏子さん(左)夫妻。18日、川口町木沢

除雪に汗を流した。

杉さんは長年、国内外で福祉活動を継続的にしている。阪神・淡路大震災では神戸の生家が倒壊、故郷に大規模な支援をした。中越地震でも二丁に配慮した物資を届けている。

十八日はボランティア十数人と、旧木沢小学校の窓ガラスを押していた高さ七尺ほどの雪山を掘り崩した。青森にある研

修所の除雪を毎年している杉さんに「(スノー)

ダンパの使い方もまいわと住民から称賛の声。「着物着てくるかと思っ」と声を掛けられた伍代さんはスコップを持

つ手を休め「着物で何ができるね」と笑って答え

た。

除雪後、近くの集会所で住民約六十人を前に「みなさんのつらいことをちょっとでも分けてもらい、明るい気持ちになっ

た。夫妻手作りの冷凍カレーも配り、握手や記念撮影に笑顔で応じていた。

二人に特産もち菓子「あんぼ」を渡した阿部邦子さん(左)は「勇気づけられて、あしたもがんばろうという気になった。春、山菜を食べに来てほしい」と声を弾ませた。





▼朝日新聞社 平成18年9月3日(日)付

**天声人語**  
 山あいの棚田の真ん中に、一本のくいが立っている。高さ約1・5メートルが、背丈の伸びた稲に隠れて、上の方しか見えないう。04年10月23日に起きた新潟県中越地震の震源を指し示す、くいだ▼震度7を観測した川口町で昨年10月、町内外から約100人が集まり、「体験防災キャンプ」が開かれた。この時、全球測位システム(GPS)の端末を使って、震源を突き止めてみようという話になった▼気象庁によると、北緯37度17分30秒、東経138度52分が震源だ。小中学生のメッセージが書き込まれたくいをみんなで運び、この田んぼにたどりついた。「ここが取れるコメを震災米と名付けたらいいか」。

参加者から、そんな意見が出た▼昨年は、田んぼは使い物にならなかつた。あせにひびが入り、全体が傾いて、山からの地下水も止まった。星野秀雄さん(66)は重機を使って、1年かけて元に戻した▼地震のつめ跡はまだ、あちこちに残っている。小学校のグラウンドに建てられた仮設住宅には、干してある洗濯物から見て、半分近くが依然入居しているようだ。多くの田んぼは今年も作付けができず、雑草が生い茂っている▼星野さんの田んぼは、これまでは順調にきている。穂が垂れ始め、台風が来なければ、豊作になる見通しだ。魚沼産コシヒカリだから、震災米の味は間違いないという。今年20日(土)に稲刈りを予定だ。「くいがあつて、作業には邪魔で邪魔で困るんだが、地震の思い出を残すには仕方がない」。星野さんはそう話した。

◀読売新聞社 平成18年9月22日(金)付



中越地震の震源地に打たれたくいの周りで始まった「震災米」の稲刈り(午前10時、新潟県川口町で)

「震央地」に  
 収穫の秋

新潟県中越地震の震源地心部の真上にある同県川口町武道窪の棚田で22日、震災後初めて、魚沼コシヒカリの稲刈りが行われた。

震源の中心「震央地」は、地元の星野秀雄さん(66)の棚田。3段連なる計23畝の棚田の2段目には、「震央地」を示す高さ1・5メートルの標柱が打ち込まれている。星野さん一家3人はこの日、標柱の周りに広がる黄金色の稲穂を次々と刈り取った。地割れた棚田を手入れし、再び収穫にこぎ着けた星野さんは「震央地のコメを収穫できるのは自分だけ。幸せだよ」と笑い、汗をぬぐった。

収穫した「震災米」は天日干しにして世話になった人たちに配るといふ。

# 再生

中越地震から2年

## 元気な集落へ学生の知恵

豊厚の激震に回響かれた新瀧川町。深い山々に囲まれた約40世帯の木沢集落に、今、住民と学生たちの笑い声が響く。畑で農機具を操る学生たちの手つきも、だいたいは慣れた。

「学生さんのおかげです。おれたちも向かえなければと、気がされたんです」。今春が活動を再開した住民グループ「フレンドシップ木沢」代表の阿部義典さん(62)は、そう振り返る。

豊厚に近い木沢集落はほとんどの家が全壊し、2割の住民が集落を離れた。残ったのは、お年寄りばかり。そんな集落を救ったのは、各地から駆けつけた孫のような学生ボランティアだった。

「いかにきれいな場所なんだから、頑張って残して下さうね」「この漬物、めっちゃ美味いわ」。



集落の活性化について話し合う阿部代表(左から2人目)らとボランティアたち(5日、新潟県川口町で)

知住事の合間に話す学生たちの言葉に、阿部さんらは驚かされ、励まされ、そして気がされた。この木沢を「離れてはならない」と、住民たちは再び結束

筋を離れての校舎を、宿泊施設として生かさないか。そんなアイデアも学生たちの口から飛び出した。すでに長岡市内の集落で実際に取り組んでいる例がある。横のつながりで情報収集していた学生が、現地を視察する機会を感じた。集落に生息する日本一小さなハッチョウトンボをシンボル

ルにしてはどうか。豊厚の中心「震央地」の棚田でとれた米を、豊厚米として観光客に振る舞うのもいい。縄文土器も出土したこの土地ならではの「木沢焼」に、山の幸を生かした絶品の山菜料理……。学生たちが次々提案した。集落はまた、宝の山。木沢自慢をまとめたマップが近く完成する。

▶読売新聞社  
平成18年10月12日(木)

## 震央の地で「結束」学ぶ

川口・木沢 家族キャンプ 子供ら稲刈りに汗



中越地震で最大震度7「集落で14日、震災の教」と「キャンプ・トライキ」を記録した川口町の木沢一帯を家族で体験し学ぶ「ファミリー木沢」が関係の地域を「シゲル」

れた。

同集落は震災時、集落に通じる道路が不通になり孤立。しかし、結果として道路を復旧させ、炊き出しを行うなど苦難を乗り越えた。キャンプは、その教訓を生かそうと同業

中越地震震源地の町に、ある棚田で地元の人に習いながら、「震災米」と名付けた田んぼの稲刈りをした。集落内を探索、家々を回り、震災時の話を

を聞いたり、炊き出しの食材を集めたりした。豊岡市滝谷から家族五人で参加した宮和志君(12)は「みんな協力して、お米の大切さを学びました。楽しかったです」と話した。また同集落の農業、星秀雄さん(65)は、地震以来とるべき炊き出しの糧を確保するために3年前を思いと感慨深い。でもこれだけ多くの人が来てくれて、集落の「元気」が戻ってきた。

◀新潟日報社  
平成18年10月15日(日)付

▼新潟日報社 平成18年11月15日(水)付

# トンネル復旧進む峠

## 中越地震2年

### あれから…

5

中越地震の震源地に近い川口峠から「峠」まで約3キロの山道が、もともと途中で折れて開かぬかた。例の7月、山の東麓は通行止めが敷かれ、木沢とトンネルが繋がらなくなった。峠には地震後、1日あたり3人から5人が通る。峠には地震後、1日あたり3人から5人が通る。峠には地震後、1日あたり3人から5人が通る。



解体現場から運んだサツランなどを取り付けて元集会所に住む星野直吉さん(左)と京子さん(左から2人目)。だんらんしている星野三さん(同3人目)らも交え、1軒の人はみんな家族! 川口峠

# 戸数3軒笑い声こだま



中越地震後、林道「ブルーシート」の下で馬の世話をしていた星野直吉さん。その時は間もなく山古原の庄に預けられ、今年も栗栗まき合に出陣した川口峠

中越地震後、林道「ブルーシート」の下で馬の世話をしていた星野直吉さん。その時は間もなく山古原の庄に預けられ、今年も栗栗まき合に出陣した川口峠

峠には地震後、1日あたり3人から5人が通る。峠には地震後、1日あたり3人から5人が通る。峠には地震後、1日あたり3人から5人が通る。



▼新潟日報社 平成20年1月16日(水)付

中越地震で大きな被害を受けた川口町木沢集落の住民が十六、十七の両日、阪神大震災の被災地神戸市などを訪ね、犠牲者の冥福を祈る。現地の住民と交流も予定しており、木沢の人たちは「地震当時のことや現況について語り合いたい」と話している。

木沢には、震災を体験した関西地方から多くのボランティアが訪れ、復興を支援した。神戸訪問は、地元の農業分野秀雄さん(六十)が「関西のみんなの支援がなければ、ここまで復興はできなかった。感謝の気持ちを伝えたい」と提案した。

神戸を訪れるのは住民ら二十五人。十七日は震災発生時刻に、同市中央区で開かれる「1・17のつどい」に参加し、西宮市の罹災者公営住宅の入居者との交流も行う。神戸市のなきさ公園に開設される交流広場では、地

## 震災地流交 神戸にコメ、そば出前

川口・木沢住民

現地できょうつあす振る舞い腕によりかけ準備

元で取れた魚沼産コシヒカリのご飯や手打ちそばを振る舞う。

十五日、木沢地区公民館で出発前の準備を行った。

た星野さんは「木沢がここまで元気になったことも、知らせたい」とそばを打つ手に力を込めていた。



神戸市で振る舞うそばを打つ木沢集落の住民(15日、川口町木沢地区公民館)

## 震災体験語り合い

川口の兵庫復興住宅で交流

阪神大震災から13年、被災体験を語り合い、市のNPO「日本災害」が主催する「交流を続けよう」と、救援ボランティアネットワークが橋渡しした。被災地だった川口、響い合った。

町の木沢集落から、中越地震から約3年、復興した。阪神大震災から10年、木沢集落の住民が交流会では、阪神大震災で西宮が自由になった。西宮市甲子園口の市「神戸の経験を学びた」交流会では、阪神大震災で西宮が自由になった。西宮市甲子園口の市「神戸の経験を学びた」交流会では、阪神大震災で西宮が自由になった。西宮市甲子園口の市「神戸の経験を学びた」交流会では、阪神大震災で西宮が自由になった。

◀毎日新聞社  
平成20年1月18日(金)付

「に精いっぱい取り組んでいる。誰かがそばにいてくれる。それだけで涙が止まらなくなる。涙をぬくいながら話を聞いた木沢集落の星野良子さん(55)は震災直後から1カ月間、車中生活をしたため、現在もエコノミクス症候群(静脈血栓症)の発症に悩まされている。阪神大震災の話を聞くと、自分の体験が目に見えて涙が出る。しかし前向きに生きている人がいる。知って、生きていくのが楽しみになってきた」と笑顔を見せた。

交流会では西宮市の大倉戸盛喜さんが影響を受けた感謝状が木沢集落の人たちに贈られた。



お土産を交換し合う中越地震の被災者(左)と兵庫西宮市の復興住宅の住民(右)。上は兵庫西宮市甲子園口の市営住宅で1月14日、北河原 大輔 撮影

## 発刊にあたって



フレンドシップ木沢 代表

阿部 義夫

何代も前から先祖さまより引き継がれ、築き守り続けてきた掛け替えのない大地での営みを、一瞬にして奪い去り、中越地方を震え上がらせた空前の大地震……『新潟県中越地震』から三年……地震直後より次々と発刊された、報道各社の記録写真集に次いで、各地に於いても『決して風化させてはいけない』『その時の記録を後生に残したい』という動きが多く見られました。

それぞれの市町村各地におかれて発刊された貴重な体験を綴った記録集……我が木沢・峠地区も保存版として『震災記録集』を残したい一念から、回覧によって全戸に問いかけ致した次第であります。

その後の気運によって木沢・峠地区の記録集が、発刊の運びに至りました。

十八年度は余り枠を作らずにと、見送っていた専門部会設置案……、今年度四月役員会で「環境・美化部会」「体験・交流部会」「震災記録集作成部会」の立ち上げに及びました。各部会で決めたそれぞれの計画に基づいて、数えきれない程の多くの皆さん方に支えられながら住民が協力し合い、お陰様で今年度も多彩な事業を繰り広げることが出来ました。改めて心より感謝申し上げます。『震災記録集』作成の最大の目的は震災の風化を防止し、後生に記録を残すこと、防災意識の啓発と高揚であります。

地震のことは思い出さなくてはならず……ではなく、地震発生直後から全国各地より支援体制を整え、駆け付けて下さった多くの皆様を決して忘れてはならないのであります。校正段階では皆様から寄せられた投稿やメッセージ等に幾度となく涙ながら綴った、小さな木沢・峠地区の大きな希望が込められた保存版がようやく完成致しました。念願であった木沢・峠地区の記録集をここに発刊できますことは誠に意義のあることであり、永久に語り継がれるものと確信致しております。また、フレンドシップ木沢では、こんな事がありましたねと、振り返って頂くため今日までの活動内容も載せさせて頂きました。

関係各位から賜りました力強いご支援・指導、誠にありがとうございました。

平成二十年二月

## 協 力

敬称略 順不同

国立民族学博物館 林 勲男（被災体験談ヒヤリング他）

富士常葉大学（震災体験談ヒヤリング）

中越復興市民会議（作成費支援他）

川口町役場（写真提供他）

川口町地域復興支援センター（写真提供他）

㈱青柳工務店（写真提供）

## 企画・編集

フレンドシップ木沢 震災記録集発行部会

阿部義夫／星野正良／星野克也／星野善辰／間野光晴



# 前へ

—— 震度7に克つ ——

**2004.10.23 新潟県中越大震災  
川口町木沢・峠地区の記録**

2008年2月

発 行 **フレンドシップ木沢**  
代 表 **阿部義夫**  
TEL 兼 FAX 0258-89-2426

印 刷 (有)めぐみ工房  
〒940-0032 新潟県長岡市干場1-2-17  
TEL 0258-32-7427

